

アダ
ムと
イヴ



Adam & Eve

アダムとイヴ

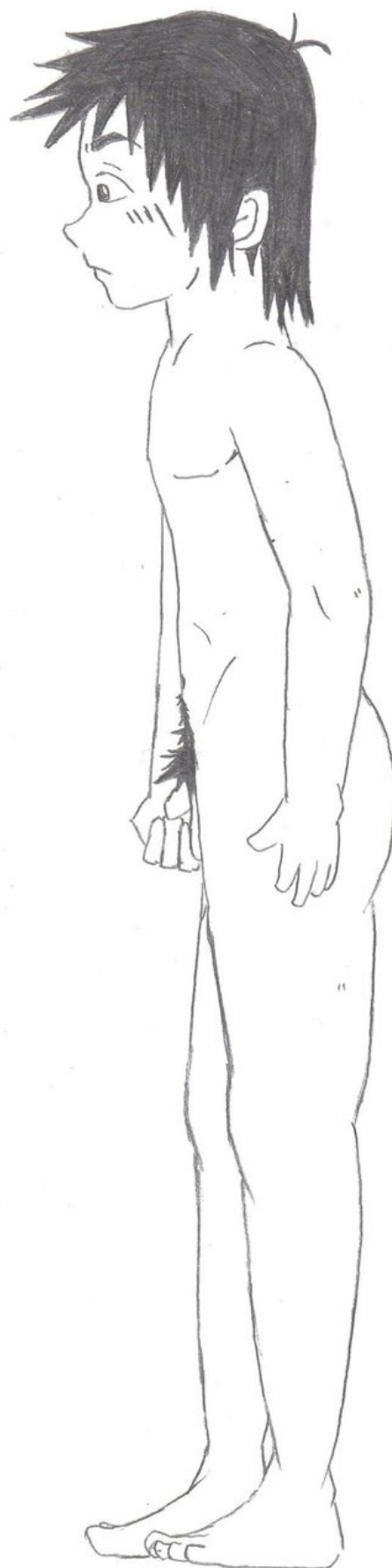
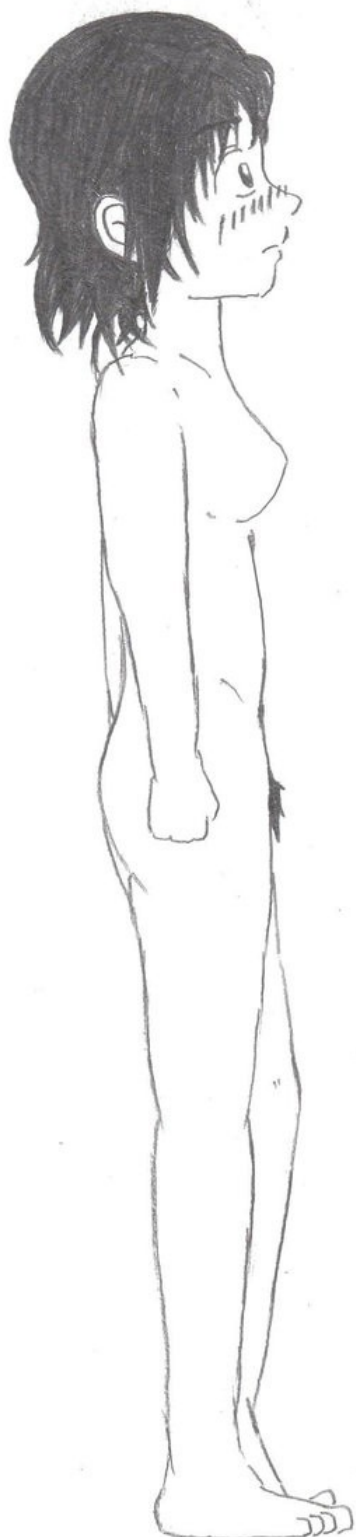


アダ
ムと
イヴ



Adam & Eve

アダムとイヴ



アダムとイヴ

By Kuneko

その日最後の学校のチャイムが鳴った。
今日も1日終わった。
今週も1週間終わった。
束縛から解放されて
周りのみんなの顔に笑顔が灯る。
部活のために着替えを始めるクラスメイトたちや
他愛もない話をする彼らを横目に
わたしは1人、窓から外を眺めた。

高校2年生の秋。
秋だって言うのに最近梅雨時みたいに
毎日雨が降ってる。
雨の日を嫌う人って多いけど
わたしはその逆で結構好きだったりする。
良く分かんないけどさ。
わたしの気持ちを代弁してくれてるみたいで。
1人じゃないんだー…って、思えるんだよね。
…なーんて、ただの気休め。

ホームルームも終わって
わたしは1人教室を出る。
当然のごとくわたしに声をかけてくる友達なんていない。

別にいじめだとか思ったことはない。
いじめなのかもしれないけど、そんな風に思いたくなかった。
わたしは何も悪くないし、何でこんなことされるのかも全然納得いかない。
みんな誤解をしている、わたしを誰も信じてくれないだけ。
みんながどんな誤解をしていてどんな目でわたしを見て
その上でこういった今の状況があること。
わたしは全て分かっているし、みんなの気持ちも理解できる。
だからあえて誰も憎んだりしないようにはしてる。
…でも、もう誰も信じない。

憎むとすれば、誰かに操られているかのような運命と
あまりにも不運な境遇くらい。
…1人ぼっちは、もう慣れたよ。

足早に教室を出て、まだ誰もいない廊下を歩く。
教室から聞こえてくる笑い声が、今日は一段と胸に突き刺さる。
歩く歩幅を大きくする。
自然とスピードも上がり、その勢いのまま階段を駆け下りる。
下駄箱に着く頃には少し息が上がっていた。
はは、何やってんだろわたし…。
ちょっと自己嫌悪に陥りながら
上履きを靴入れにしまい、外履きの靴を取り出し
それを床にサッと落とす。

…パーン。
静寂の中で、靴が床を叩くその音だけが
やけに大きく響いた。
その後ろで雨の低音が絶え間なく鳴り響く。

悔しいなあ。
家に帰るまでは
我慢するって決めてたのに。
わたしの目から零れ落ちたそれは
靴の中に音もなく消えた。

誰でもない誰かに言いたい。
今日はわたしの
17歳の誕生日なんだ。

雨の帰り道。
今日は本当に雨足が強くて
傘を差しているのに
制服はすでにびちょびちょ。
1着しかないのに、どうしてくれるのよ。

こんなに見事にわたしの感情を表現してくれるなら
突き抜けるくらい晴れた日は
わたしの気持ちも、晴れやかとは言わないまでも
穏やかくらいにはしてくれればいいのに。
…とか、馬鹿みたいなことを
本気でちょっと願ったりしてみるわたし。
今日初めての笑いは
そんな子供っぽい発想をしている自分に対しての
苦笑いだった。

そんなことを考えているうちに
気がつけばもう、家の近くまで来ていた。

まだ高校生だって言うのに
わたしは一丁前に1人暮らしをしている。
親がいないとか、そう言うわけじゃない。
いろいろあって親元を離れ
自分の意志で1人暮らしと言う選択肢を選んだ。
生活費は毎月親から送られてくる仕送りと
週3でやっているコンビニのバイトで賄っていた。

高1から始めた1人暮らし。
最初は分からないことだらけで大変だったけど
今でも何とか続いているんだから
うまくいっていると言っていいと思う。
学校でもあんなんで、家でもこうだから
本当に1日中1人って感じ。
もう慣れたって言ったけど
やっぱり1人が無性に寂しくなるときがある。
今日なんて特に…ね。

家のアパートの前に着く。
家に帰っても宿題やるくらいだよな。
そんなこと思うとちょっと虚しくなって
自然と、部屋に向かう足が止まった。

はぁ。
大きなため息を1つ吐き
アパートを囲う柵の間から
102号室の自分の部屋のドアを見た。

…ん？
なんだかおかしい。
雨のせいでよく見えないけど
ドアに付いたポスト入れのすぐ下に
誰かの頭が見える…気がする。
…誰かがわたしの部屋の前で
座っている…？
でも一体誰が…こんな雨の日に…。

ちょっと家に帰る前に
駅前にでも行ってブラブラしようかと思ってたけど
とりあえず気になって仕方なかったので
変に高鳴る胸を押さえつつ
わたしは自分の部屋に恐る恐る向かっていった。

雨で濡れた白い柵状の外扉を開けて
102号室に足を急がせる。
10mくらい手前で、わたしは足を止めた。

やっぱり誰かが
わたしの部屋の前で座ってる。
髪や服装からして男の人かな。
年齢はちょっと分からない。
顔を下に向けて両足を伸ばし手をダランとさせている。
髪や着ているものが
びちょびちょに濡れているのがこの距離からでも分かった。

何をしているんだろう…？
疑問とちょっとした恐怖に包まれながらも
わたしは歩を進める。

2mくらいの距離まで近づいても
その人はまったく姿勢を変えようとはしなかった。
気づいてないだけなのかな…。
ここまで来て分かったけど
体格とかからしてみても、男の人…みたい。
更に言うと服装が半袖Tシャツにハーフパンツという
この季節にしていたら明らかに寒そうな服装だった。
もっと言うと驚いたことに、裸足だった。

どうしようかな…
そっとしておこうかな…とか思ったけど
この人がここにいる限り
わたしは中には入れない。

「…あ、あのお…」

意を決して話しかけてみた。
…返事はない。何の反応もない。
もうなんなのよ一体。
なんなのよ…この誕生日…。

流れ落ちそうになる涙を必死でこらえて
わたしは半ばやけになって
目の前の謎の男との接触を図った。

「あの！すみません！
そこにいられると、わたし入れないんですけど！」

たぶん今日一番だと思われる大声で
わたしは言い放った。

やっぱり無言。
…もしかして寝ちゃってるの？
ほんとと信じらんない。

手に持っていた傘を壁に立てかけ

その男の横にしゃがみこんで

「あの！」と言いながら

大きく彼の体を揺らした。

そこで初めて気づいた。

すごく息が荒い。

触れた体から普通の人より早い鼓動が

ドクンドクンと伝わってきた。

「ど、どうしたんですか!?!」

なんかただごとじゃないような感覚に襲われて

わたしはとにかく声をかけた。

ようやくわたしの声が届いたらしく

その顔が上がる。

たぶんわたしと同じくらいの年の男の子といった感じ。

でもわたしを見つめてくる細い目や

完全に疲れきった表情が

わたしより5歳ほど年上であるような

老けた印象を与えた。

どうしようかと無言で迷っていると

その男の人がボソッと一言呟いた。

「…み、水…。」

「…え？」

「み、水を飲ませてください…。」

すぎる様な目でわたしを見ながら

彼はそう言った。

…のどが渴いているんだな。

水くらい全然いいけど

そこにいられると中にも入れないよ…。

でも、ほんとくわけにもいかないし。

「…立てますか？」

とりあえずわたしはそう聞くと
男の人は小さく頷きヨロヨロと立ち上がった。
175cm くらいかな。
わたしより身長は遥かに高いはず。
更に明らかにおかしい服装をしていて、しかも裸足。
どういうことなんだろう？
疑問は積もるばかりだった。

部屋の鍵を開ける。
わたしが中に入って水を汲んで持ってきて
それを渡せばそれで終わりだったんだけど
ここに1人で待たせているのも
なんだか不安と言うか、なんかマズい気がしたので
わたしは彼に肩を貸して
一緒に部屋に入っていった。

とりあえず玄関のところで
ドアに向かい様な形で座ってもらった。
「水を…」と喋ってからそれ以後
彼はまだ何も発言していない。
そんな人を家に入れて大丈夫なのかと
さすがにちょっと思ったりもしたけど
何故かこの人からは
そう言った危険な印象は全く受けなかった。
だからこうして現に玄関まで上がらせている。

急いで蛇口をひねり水を注ぐ。

「はい、どうぞ。」
誰かも分からないその人にコップを差し出すと
目を見開き、手を震わせながらそれを受け取ると
注がれた水を本当に一気に飲み干した。

「はあー、生き返ったあ…。」

ようやく笑顔になってそう言う彼。
用が済んだんなら、もう帰ってくださいと
言おうとした次の瞬間
その男の人がその場にゴロンと
寝転がってしまった。
びっくりして唾然とするわたし。
ちょ、ちょっと！と声をかけようと息を吸い込んだときにはもう
彼の気持ち良さそうないびきが聞こえてきていた。

もう、なんなのよ一体…。
玄関で幸せそうに眠る彼の寝顔を見ながら
わたしはただ呆然としていた。
それと同時に心臓がドキドキしているのに
ようやく気づいた。
…ど、どうしよう……………。

これが彼との
最初の出会いだった。

テレビをつける。
7時からいつも見ているクイズバラエティー番組が始まる。
いつもなら今週も1週間頑張った自分へのご褒美として
お腹がよじれるほど笑うんだけど
今日はその内容が全く入ってこない。

自分にとって特別な日であるからって言うのも
もちろんあるんだけど
それ以上の理由として挙げられるのは
わけあって今日はわたし1人じゃないから。

あれから3時間ほど経った今でも
一体これは何なのかがいまいち把握できてない。
…いやいまいちと言うか、全く…かな。

6畳1間のこの部屋から玄関に目を向けると
相変わらず見ず知らずの男の人が
飲み会で、性にも合わず飲み過ぎて
デロンデロンに酔っ払って帰ってきたサラリーマンみたいに
そこに寝転がっている。
テレビの音で聞こえないけど
きっとまだいびきもかいていることだろう。

どうしようかなあ…と
枕を抱きしめながらその光景を見ていると
彼の頭がビクッと動いたのが分かった。
わたしがドキッとするのと同時に
彼は上体を起こしてようやく目を覚ました。
わたしのいる部屋に背を向け
ずっと玄関のドアとにらめっこしている。
自分が何でここにいるのか、ここはどこなのかを
頭の中で整理している様子が
後ろ姿から想像することができた。

とりあえず無視するわけにもいかないし…
わたしはテレビを消して彼に近づいていった。

「…あ、あのお…
大丈夫…ですか？」

恐る恐る聞くわたしの声に気づき
彼がわたしの方を向く。
何も把握できていなさそうな
でも何故かものすごく落ち着いている
そんな表情に見えた。

パチクリパチクリと
何度も何度も瞬きを繰り返しながら
わたしの方をジッと見つめてくる。
不覚にもドキドキしてしまうわたし。
だって男の人に見つめられたのなんて
もの凄く久しぶりだったから…。

どうしようかとわたしが迷っていると

「…ここ、どこだ？」

と当然のごとく彼が聞いてきた。

「ここは…わたしの部屋。
ちょっと前にわたしが学校から帰ってきたら
あなたがわたしの部屋のドアの前で座ってたの。
覚えてない？」

改めて見るとやっぱりわたしと同年代くらいに見えたので
急にタメ口にシフトさせてしまった。
まあ問題ないでしょ。
わたしの言葉を聞くと彼は「あー。」といった表情になり

「思う出した。

それで誰かに部屋に誘い込まれて
水を飲ませてもらったんだったな。
てことはその誰かって言うのが君で
その部屋って言うのがこの部屋ってわけか。」
「そういうこと。
…って言うか誘い込んでなんかないから！
辛そうだったから中に入れてあげたの！」

全く何を言い出すのかと思ったら…。
感謝の1つもしないでどう言うつもりなの。

「あーそうだったのか。
ありがとう。」

…よろしい。

「…で、なんだけどさ。
俺は何でこの家のドアの前に座ってたんだ？」

何を言い出すのかと思ったらわけの分からないことを…。

「そんなのわたしが聞きたいくらいだよ。
って言うかそれは完全にあなた自身の問題でしょ。
…覚えてないの？」

少し顔をこわばらせて
また「うーん…。」とうなる。

「…全く思い出せないなあ。
と言うか…」

またわたしに背を向けてドアの方を向き
そのままつぶやくように続けた。

「何も思い出せない。」
「え？」

いきなりの発言に流石にびっくりするわたし。

「俺今いろいろ考えてたんだけどさ。

いろいろ考えても最後の記憶が

このドアの前に座ったことなんだよね。

それ以前のことが全く思い出せない。」

「え…それって…。」

記憶喪失？

だとしたらヤバくない？

「でも本当に何も思い出せないんだ。

自分の昔の姿も親の顔も好きだったことも自分の名前さえも…

思い出そうとするとモヤがかかるみたいに

ボワァ〜って見えなくなる。」

そうつぶやく後ろ姿はどこか寂しそうに見えた。

わたしとしては変なことに巻き込まれた

いわば被害者的立ち位置なわけだけど

なんだか放って置くわけにもいかないような気がした。

体をドアに向けたまま顔をわたしの方に向けて

「どうすっかな。」とハニカミながら言ってくる彼。

どうしよう…

ここで帰すわけにもいかないよね。

…と言っても何も覚えていないわけだから

帰る場所も分からないってことだし。

「とりあえず今日はー」

「…ヘッッッッッッッックシュン！！！！！」

泊まっていきなよと言おうと思ったら

彼が大きなくしゃみをした。

良く考えたら秋の夜に半袖ハーパンだったんだ。

しかも雨に濡れたまま3時間もここで寝てたんだよね。
そりゃ風邪だってひいちゃうよ。
…と言うか今の今まで放置していたわたしにも
責任あるよね…。

「と、とりあえずお風呂入りなよ！
ちょうどもう沸いた頃だから…さ。」
「そうか…。
んじゃお言葉に甘えて。」

何の申し訳無さも感じさせないようにそう言うと
彼は立ち上がり廊下に上がってきた。
ちょっとは躊躇するかな…とか思っていただけに
あっけにとられてしまった。
ああフローリングが濡れちゃっ…た。

お風呂場は玄関と部屋の間の廊下の横についている。
向かい側にトイレといった構造。

「ここね。
脱いだ服は洗濯機にでも入れておいて。
タオルは適当にかかっているの使っちゃっていいから。
シャンプーもリンスもご自由にどうぞ。」
「おー、サンキュー！」

記憶を失くしてしまっていることを
気にしているのか気にしていないのか
良く分からないような明るい声でそう言うと
彼はお風呂場に消えていった。

ボタン。
扉を閉めてわたしは1つ大きな深呼吸をする。
頭の中でいろいろ整理を試みる。
見ず知らずの男の人を家に上げた。
その人は自分のことを思い出せないと主張している。
怪しいと言われれば怪しすぎるくらいの人だけど

何故か嫌な恐怖みたいなものは感じない。
だからこうして今に至っているわけだし…。

風呂場のドアを呆然と見つめながら
とりあえず部屋に戻ってテレビをつけた。
大好きなテレビ番組はもう終盤に差し掛かっていた。
あー、結局全然見れなかったなあ。
いつもならこんなことになったら1週間無駄にしたような気になって
もの凄くへこむんだろうけど
今日は全くそんな感情にはならなかった。
…と言うかそんなこと考えてる暇さえなかった、かな。

とにかく彼がお風呂から上がってきたら
どうするかを考えなくちゃ…。
帰すわけにはいかないよね、記憶を失くしてるし。
お泊りするとなると…まあそうなるんだろうけど
どうやって寝ればいいのか…。
ベッドは1個しかないし、もしかして一緒に寝ることになるのかな。
…お、襲われたりしないよね？
わたし一応まだ…処女だし。

なんかいろいろ想像して1人で恥ずかしくなってしまった。
居候の身でそんなおこがましいこと頼んでくるわけ無いじゃんね。
居候は居候らしく
カーペットの上にでも寝てくれればいいのよ。
冷え込むと思うけど…そこは我慢してもらえない。
洋服ぐらいは暖かそうな貸してあげようかな…
とか思ったけど
家に男性用の服なんてあるわけないじゃん。
わたし女の子の中でも身長小さいほうだし
着れる服なんてたぶん1着も無いよ。

…ん？洋服？
そういえばあの彼…着替え…

と、次の瞬間。

風呂場のドアが勢い良く開いた
咄嗟にそちらに目を向けるわたし。
服…どうしたんだろう。
わたしの頭の中はとりあえず今、そのことでいっぱい。

「いやあ、いい湯だった！」

頭をタオルで拭きながら
満足げな顔でお風呂場から出てくる彼。

…上半身裸…だ。
ま、まさかね。
意を決して更に視線を下に落としていく。
…わたしは自分の目を疑った。

頭を拭きながらわたしの方へ近づいてくる彼は
上も、…下も
何も履いていない
すっぽんぽん姿だった。

大声で叫ぼうか迷った。
でも、何故かそんな気になれなかった。
わたしはただ目の前のその光景を
無言で眺めることしかできなかった。

わたしのちょうど目の前で立ち止まる彼。

「いい湯加減だった。お前も入っちゃったほうが良いぞ。」

満面の笑みでそう言う。
と言うか今はそんなのどうでも良くて…

もしかしたら、見たの初めてかもしれない。
…いや完全に初めて。
頭を拭くたびに揺れる体に、揺れる…おちんちん。
漫画で見るようなかわいい感じのじゃなくて
もう大人のおちんちんって感じ。
…おちんちんって言う言い方もなんか似合わないかな。

おへその下には男性特有のギャランドゥが生えていて
その下のおちんちんの毛に繋がっている。
もうしっかり生え揃っていた。
更にその下にはボロロンと大きなおちんちんが垂れていた。
本で読んだことあるだけだから合っているかは分からないけど
たぶんこれが『包茎』って言うんだと思う…。
おちんちんの袋にはしっかり2個タマタマが収納させているのが分かった。
女の子が見ちゃいけないのものであることくらい分かってるけど
突然のことだったし、何よりびっくりしていたせいでどうしていいか分からず
ただただ初めて見るそれを、目に焼き付けていた。
…興味がなかったっていったら、きっと嘘になってしまうけどさ…。

わたしの視線が彼に
もっと言えば彼のおちんちん1点に注がれているのに気づいたのか

「なんだ？」

と聞いてきた。

急に頭に血が上る感覚に襲われて
もの凄く恥ずかしくなった。

「わわ、ご、ごめんなさい！」

視線をそらして咄嗟に謝るわたし。
謝って気づいたけど、わたし…なんか悪いことした？
確かに着替えを渡さずにお風呂場に連れて行ったのは悪かったかもしれないけど
それについてはあっちにも非はあるはず。
と言うかそれ以前に着替えが無いからって
女の子の前で何も隠さずにお風呂場から出てくる！？普通。
タオルなら何枚かあったはずだし
その1枚を腰に巻くぐらいのマナーがあってもいいんじゃないの！？
なんにしても、すっぽんぽんはやっぱりおかしいよ…。
小学生じゃないんだからさ…
もう立派なさ…おちんちんなんだから…さ。
襲ってくる気なのかな…とか、ちょっとは考えたけど
なんかそんな予感も全くもって感じなかったせいか
そう言った危険感を感じることはまるでなかった。

「と、とりあえずさ、か、隠してよ！
着替え渡さなかったのは申し訳ないけどさ。
すっぽんぽんで出てくるのはやっぱりおかしいよ…ね！？」

紅潮する自分の顔を感じながら
わたしはとにかくそのことを告げた。

「隠すって…なにを？」

おそらくまだ丸出し状態の彼が
本当に何も分かっていないような声でそう聞いてきた。

「何って、それくらい分かるでしょ！」

「わ、分かんねえよ…。」

「普通女の子の前だったら隠すでしょ！」

「…だから何のことだよ。教えてくれよ。」

なんだか困ったような声を出す彼。

もうこれじゃあちが明かない。

「だから！それ隠してって言ってるの！」

わらしは恥ずかしながら彼のおちんちんを指差し

近所迷惑にならない程度の声で、そう叫んだ。

頭を拭くのを止めた彼がきょとんとした顔でこっちを見てる。

おちんちんも揺れるのを止めてきょとんとしている。

「ああ…これのことか。」

恥ずかしさを一切感じていないような顔でそう呟くと

彼はおもむろにおちんちんを自分の手で摘んで

わたしの方に向けてきた。

皮に包まれたおちんちんの中から

少しだけ色の違う部分が見えたのが分かった。

「きゃ！」

咄嗟に顔を背けて小さく声を上げる。

おちんちんってあんなんなってるんだ…。

初めて…見たよ。

「あ、すまん。

ちんぽ苦手なのか？」

「いや…苦手とかそんなんじゃないくて…

いや得意でもないけど！

普通初めて会った人の前で

おちんちん出すのっておかしいでしょ！
それに恥ずかしくないの？
今君、わたしにおちんちん見られちゃったんだよ！？」

必死に説得するわたし。

「いや…別に。」

わたしの期待とは裏腹に、そう答える彼。
なんで…？男の人っておちんちん見られることに
そんなに抵抗ないものなの…？
いやむしろ抵抗ないにしても
レディーの前でおちんちん隠すくらいのモラルは
あるべきでしょ！？

「本当に恥ずかしくないの？」

「うん。」

「全く？全然？」

ドキドキしたりしない？見られちゃってるんだよ？」

「…特に何も感じないぞ。」

生まれたままの姿で立ったまま
まるで少年のような顔で、そう告げる彼。
小さな男の子とかだったらまだいいけどさ。
流石におちんちんに毛が生えちゃってると
直視することなんてできないよ。
と言うか、おちんちん自体見たの初めてなのに。
目の前に写る光景に改めて恥ずかしくなり
心臓がドキドキと高鳴っていくのが分かった。

「…昔から家ではそうやって

お風呂上りはすっぽんぽんでずっといたの？」

「…いや、分かんない。

その…昔のこと思い出せないし。」

あ、そうだったね…。

「なんか、自分の裸を見られて恥ずかしい思いしたこととか
なにかを見たりされたりして恥ずかしいとか感じた記憶って
ない？」

「うーん…。

恥ずかしいと思ったことか。

分かんないなあ、全く何も思い出せないし。

と言うか恥ずかしいって言う感情がいまいち分からないぞ。」

そうはっきりと断言して言う彼。

その顔に全くと言っていいほど恥ずかしさみたいなものは感じなかった。

これでようやく分かった。

彼は昔したことや思い出や自分のこと、家族のことなどの

過去にあった事実としての記憶のほかに

感情的な精神面での記憶も

少なからず失ってしまっているんだ。

少なくとも、『恥ずかしい』という感情は失ってしまっている。

だから、男の子の大事な部分を丸出しにしても

何も感じなくなってしまうんだよね。

なんかいろいろと問題山積みで

頭がパニックになりそう…。

「と、とりあえずおちんちんは隠そ！

普通の男の人はね、人前ではおちんちん隠すものなの！」

「…ふーん。そうなのか。変なの。

こっちの方が気持ちいいのに。

まあ確かにさっきまで俺、服着てたしな。」

そう言ってようやく頭を拭いていたタオルを腰に巻いて

おちんちんを隠す彼。

やっとちゃんと見れるよ。

…もう頭にはしっかり焼き付いちゃったけどさ…。

ふう。

お互い1つ息を吐く。

「隣…座ってもいいか？」

頭を掻き笑いながらそう聞いてくる彼。
その笑顔に、怪しいものを一切感じなかったのもので
「…うん。」と何の躊躇いもなく承諾してた。

「よいしょー！」

そう言ってわたしのすぐ隣に腰を下ろす彼。
…と言うか、近付き過ぎ…。
隣は隣だけどさ、体が密着してると言うか…。

そりゃあわたしだって一応1人の高校生だもん。
そんなことされたらドキドキしちゃうよ。
…しかも当の彼は、腰にタオル巻いてくれたとはいえ
ほとんど全裸なわけだし…。
しかも体育座りをしたからタオルなんてほとんど意味なし。
小さいタオルから、おちんちんが完全にはみ出して見えていた。
そんなことお構いなしに彼は幸せそうな表情をしている。
記憶を失くしていることなんて
どうでもいいと言ったような感じ。
こんな姿を見ていると
わたしも一度記憶を失くしてみたいと思ってしまう。

…とかいろいろ考えるようにしてたけど
結局は頭の中はおちんちんのことでいっぱいだった。
目を閉じても頭の中でブラブラ揺れる彼の…それ。
このままじゃ、わたしが駄目になっちゃう。
やっぱり服は着てもらわないと困る。

腰を上げて洋服ダンスの前に移動する。
途中チラッと見た化粧台の鏡に写ったわたしの顔は
自分でも驚くくらいまっかっかだった。
と同時に、まだ制服を着ていることに少し違和感を覚えた。
とりあえず、なんでもいいから着れるような服を…！

必死で洋服を漁る。

「どうしたんだ？」

またまたきょとんとした声で聞いてくる。

「やっぱり洋服は着てもらわないと困る！
わたしの方が恥ずかしくなっちゃうし。」

そう言いながら彼の方を向き直す。
この角度からはタオルなんて何の意味もなさず
おちんちんは丸見えだった。

「…なんでお前が恥ずかしがるんだ？」

不思議そうな顔でそう聞き返してくる。
視界に完全に入るおちんちんを見て見ぬ振りして

「…とにかく恥ずかしいの！」

と答えになっていないような答えを言い放った。

きっと良く分からないといった表情をしているであろう彼を背に
わたしはひたすらタンスを漁った。
でも、彼が着れそうな服は1着として存在しなかった。
当たり前だよ…そんなこと分かってたけど
どうしていいか分かんなかったんだよね。

掛け時計を見た。
時間は夜8時を少し回っていた。
この時間ならまだ、あのデパートは開いてる。
迷ってる暇はない、行こう。
わたしは床に置いてあったかばんを拾い上げ
小走りで玄関に急いだ。

「おい、ちょっと！」

わたしが無言で一気に動いたので不安になったんだろう。
彼がわたしを追いかけてきた。
急いで靴を履き、立ち上がって振り返る。
少し驚いた顔の彼が素っ裸で立っていた。
急いで近寄ってきたから咄嗟のことでタオルが落ちてしまったみたい。
揺れるおちんちん。また眩暈が…。

顔が真っ赤になるのを感じながら
わたしは彼の顔を見て言った。

「君が着れるような服を買ってきてあげるから
それまでおとなしく待ってて！
警察に捕まりたくなかったら
間違っても家の外に出たりしないでよ！
それから部屋のものごちゃごちゃ漁ったりも禁止！
30分くらいで戻ってくるから！
分かった！？」

変に強気に言葉を投げ捨てるわたし。
彼は言われたことを頭の中で整理するように少し考えると

「わ、分かった！」

と言って敬礼のポーズをした。
もう…本当に子供みたい。
体は完全に大人なのに…さ。

9時にはデパートは閉まっちゃう。
とりあえずそれまでに服を買ってきておかないと
今夜、わたしは眠れない夜を過ごすことになるだろう。
…男の人がいるってだけで寝にくいって言うのに。

ドアを開き外に出る。
しっかりと施錠して閉まったかどうか2，3回確認してから
外に止めてある自転車に飛び乗り

わたしはアパートを飛び出した。

デパートに向かう道で

わたしは一体何をやっているんだろうと

幾度となく思った。

今日わたし、誕生日なんだよ？

もうあと3時間くらいで、誕生日終わっちゃうんだよ？

本当なら惨めで寂しくて虚しくて

この時間くらいには1人部屋で泣いていたんだろう。

それもどうなの？って思うけどさ。

今は、泣く余裕すらない。

ただひたすら

デパートに向かってペダルを漕ぎ続けた。

閉店 30 分前。

デパートに着いた。

もうほとんど空車の自転車置き場にわたしのそれを止め
小走りで中に入っていく。

紳士服売り場の 3 階まで

ただ無心でエスカレーターを駆け上がっていく。

仕送りとわずかなバイト料で生計を立てているわたし。

お金に余裕があるわけではもちろんない。

財布の中身を改めてチェックする。

…できるだけ安いやつを買おう。

当たり前だけどわたしはレディースしか買ったことがない。

お父さんにプレゼントで服を買ったことなんて当然のごとくないし
彼氏も…今までできたこともない。

こんな時間に紳士服売り場に制服姿の女が 1 人で来ている…。

そんな姿ってたぶん、周りから見たらかなり不思議な光景だよね。

変な子に思われてないかな…。

人一倍人目を気にするわたしにとって

男性の洋服を買うというおつかいは

相当な勇気を有する行為だった。

上は T シャツを着ていたけど

流石に秋だし長袖のを買ってあげた方がいいよね。

カットソーが 1000 円で売っていたけど

これじゃ流石に寒いかな…。

いろいろ考え、奮発して黒いセーターを選ぶ。

彼なら黒が似合うかなーと

ちょっとだけ色にも気を使っている自分が

なんだかおかしかった。

着られればいいのにね。

ズボンはジーパンでも大丈夫かな。

ジーパンなら何にでも合うしね。

でも一応今から寝るんだよね。
…そう考えるとこの選択肢はちょっと酷かなー…。
ってことで足元がキュッとしていないタイプのジャージをチョイス。
色は緑に白のラインが入っている。
スポーティーな感じが彼に良く似合うと思う。
…彼氏のプレゼントの洋服選びとかだったら
きっともっとウキウキ気分になれるんだろうけどな。
…なんてちょっと考えちゃった。

さて…あとは肝心の…下着。
流石に男性の下着コーナーに行くのには
ちょっと、と言うよりかはかなり抵抗があった。
いまどきの男の人の下着事情とか全く分かんないし…。
意外にも男性下着でもいろいろな種類があっぴゃく。
今はほとんどトランクスタイプになっちゃってるんだね。
ブリーフタイプもちょっとだけ売ってたけど
もう過去の産物と言った扱いがされていた。
でもいまどきブリーフはもうないよね。
それを履いてる彼を想像して、1人でちょっと吹き出してしまった。

…にしても、一体どれを買えばいいのか全く分からない。
男性が下着を選ぶときに基準って…
やっぱり大きさ？
い、いや分かんないけどさ…それくらいしか思いつかない。
仕方なくわたしはさっき見た彼のそれを
必死で思う出そうとした。
…ボロロン。
鮮明にインプットされた映像を頭の中のスクリーンに投影して
やっぱり1人で恥ずかしがっているわたし。
あわてて誰かに見られていなかったかと
周りをきょろきょろと見回す。
ふと誰かと目が合ったかと思うと
それは売り場に置かれている試着用鏡に映る自分だった。
何照れてんのよ…顔真っ赤よわたし。

とりあえず考えても分からないものは分からない。

閉店時間のこともあるし
わたしは目に付いた黒いボクサーパンツを
サイズも気にせずに取り取った。
もうさっさと買って帰ってしまおう。
急いでレジに向かい、顔も見ずに無言で
手に持った3点を店員に差し出す。
カウンターに展示してあった
3足入り 1000 円の男性用くるぶしソックスが目につき
この際だからと、無言で付け足した。
変に思われるよね…でも気にする必要なんてない、無理だけど。

1つずつ無言でスキャンする店員さん。
愛想悪いなーとか思ったけど
そのほうが逆に今のわたしには好都合。
全部スキャンして店員さんが「…6980 円です。」と告げる。
男の人の声、しかも若い人の声に聞こえた。
全く接客する気のないような、やる気のない声。
ふと気になって顔を上げ、店員を見ると…。
頭が真っ白になった。
それは同じクラスの諸星君だった。
お互い目が合って沈黙。
その数秒間が永遠のように長く感じた。

わたしはとりあえず急いで財布から 1 万円札を取り出し
カウンターの上に差し出した。
明らかにびっくりしている様子の諸星君は
無言でそのお札を受けとりレジを操作する。

「…3020 円のお返しです。」

ロボットのような声でわたしにそう告げると
おつりとレシートを差し出してきた。
わたしはかける言葉もなくただそれを受け取り
商品の入った袋をおもむろに奪い取ると
逃げるようにその場から立ち去った。

下へと行くエスカレーターを
来たときとは逆に駆け下りる。
穴があったら入りたいとは
こういう絶望的な恥ずかしさのときに使う言葉なんだろう。
完全にわたしってバレてた。
過去にあんな変な噂を立てられ
それを学校中のみんながみんな信じている中で
わたしが夜に男の人の服一式を買っていったと言う情報が
クラスの人…そして学校中にバレたら…
考えたくもないほど、絶望的なシナリオだった。
なんでよりもよって
今日と言う日のあの時間帯に
あのデパートのあそこのレジで
同じクラスの人が働いてんのよ！
こんな不運なことってある！？
わたし神様にはとっくのとうに見放されてるとは思ってたけど
どうやら界王様にも見放されたみたいね。
もう、涙も流れないよ。

小走りで自分の自転車に近寄り
洋服一式がつまった袋をかごの中に放り込む。
サドルを跨ぐのと同時にデパートが消灯し
店が閉まるのが分かった。
どうやらわたしが最後の客だったみたい。
それを確認してから
わたしは来た道と逆方向に走り始めた。

もう何考えたってしょうがない。
無心でいよう。
夜の道をゆっくりと自転車で漕ぎ進み
行きのときより結構な時間をかけて家に到着した。
部屋の前に自転車を止め、ドアに手をかける。
鍵がまだ掛かっていることを確認し、とりあえず一安心。

それを開けて中に入ると
彼がわたしのベッドの前で

体育座りをして小さくうずくまっていた。

タオルは巻いてる…けど

やっぱり見えちゃってる…。

ボタン、と閉じるドアの音で

わたしが帰ってきたことによりやく気づき

「おー帰ってきたぁ」と少年のような笑みを浮かべて

わたしを見てきた。

「ど、どうしたの？」

彼に近づきながら聞くわたし。

「なにが？」

「いや…そんなにうずくまっちゃって。

あ、もしかして寒かった？」

「んまあちょっと寒いのはあったけど

何もするなって、出てくとき言ったっしょ？

だからこうして待ってただけ。」

…まあつまりは帰ってきたとき何かが変わっていたら

わたしに怒られると思って

ジーーーーっと待ってたってわけね。

ほんと…考えは小学生なんだから。

「…と、とりあえず！

服買ってきたから、着て！」

そう言ってわたしは袋の中から買ってきたそれを取り出す。

「別に服なんてなくても大丈夫なんだけどな…。」

わたしの苦労も知らないで

そんなことを平然とつぶやく彼。

「…わたしが恥ずかしいって言ったでしょ！

それに服がなきゃ外にも出れないじゃない！」

ちょっとお母さんになって様な気持ちで
わたしは言う。

「分かったよ。」

素直にそう答える彼。

ハサミで1つ1つの服の値札を取ってから
彼にそれらを差し出した。

立ち上がる彼、座るわたし。
まずはパンツを手にする彼。
ちゃんと履けるかな…ちゃんと収まるかな…
完全にポロリしちゃってるおちんちんを見ながら
わたしはいろんなドキドキに襲われていた。
そんなことをしているうちに
あっという間にボクサーパンツは彼の腰まで上がっていた。
と同時にタオルを取り去る。

良かった〜とりあえず履けたみたい。

「きつくない？大丈夫？」

「…うーんちょっときついけどな。

まあ着れないことはないな。」

せっかく買ってきてあげたのに。
謙遜ってことを知らないんだから全く。
…まあ記憶を失っちゃってるわけだし
あんまり多くを求めるのは酷ってものだけだね。

これでようやく直視できる。
でもボクサーパンツ1枚の男の人って言うのも
それはそれでやっぱりドキドキしてしまった。
ちょっとサイズが小さかったせいもあって

大事な部分がもの凄く強調されて浮き上がっている。
いわゆる『もっこり』ってやつ…かな。
おへその下のギャランドゥはセクシーにちょびっと見えていて
大事な部分はしっかり隠されている。
こう見るとスタイルもいいしちょっと格好いいな。
すっぽんぽん姿をあんなにも見せられて
この数時間で、もう知らないところなんてないくらい
彼の体を見てしまったけど
これはこれでちょっとドキドキ…。
とか勝手に品評してしまっていた。
そんな自分にまた恥ずかしくなってしまうわたし。

その後ズボン、セーターを身に付け
ようやく普通の格好に戻った彼。

「いやーやっぱり服は暖かいな。
サンキューサンキュー！」

かなり満足気といった様子の彼。
ずっとすっぽんぽん姿だったから
服を着た彼に若干違和感を感じてしまったけど
少しでもそんな感性が芽生えてしまっている自分に
若干の焦りを覚えたのも事実だった。
…ま、全然たいしたことじゃないけどさ。

ようやく2人で気兼ねなくテーブルの前に座れるところまで来た。
…といってもまだまだやるべきことと言うか
解決すべき問題点はいっぱいあるんだけどね。
さっきのデパートのせいで、更にもう1個増えちゃったし…。

とりあえず彼が記憶を取り戻すまでは
この部屋に住ませてあげるしかないよね。
警察に相談するのもいいかもしれないけど
たぶん何も彼が覚えていないんじゃない、話にもならないはず。
第一彼の両親が、息子が行方不明になったと警察に通報でもすれば
ニュースになったり知らせが来たりするでしょ。

それまでの辛抱だと思えば
さほど荷の重い役どころであるとは思わなかった。
今までわたしを苦しめてきた境遇のことを考えると
こんなの序の口に過ぎない。
むしろこれも運命だと思ってやりきるしかないと思えるほど
わたしの心は自分でもびっくりするくらい
強靱なものとなっていた。

よし！
彼と話すべきことはたくさんある。
…けど、今日は流石に疲れた。
時計を見ると、夜の 10 時を回っていた。
明日あさっては辛うじて幸運にも土日で学校も休みだし
今日はもう寝ようかな…。

そんなことを思いながら目を閉じる。
まだ心臓はドキドキしていたけど
一気に今すぐにでも眠れるような眠気に襲われた。
あと 1 歩で夢の中へ入れるような暗闇と静寂が広がる。
…と、わたしの耳元で男の人が何か呟いているのが聞こえた。
夢の中か現実なのか分からなかったけど
それは確実に隣にいる彼の声だった。
目を開けて彼の方を向き「ん？」と聞き返す。

「おめでとう。」

彼の口の動きは確かにそう言っていた。
「え？」更にわたしは聞き返す。

「だからあ。
誕生日おめでとう。」

満面の笑みをわたしに向けながら彼はそう言った。

びっくりするわたし。
眠気が一気に吹き飛んだ。

と言うかこの数時間、いろいろあり過ぎて
今日が自分の誕生日だって言うことが頭から消えてしまっていた。

「…なんで？知ってるの？」

またまた聞き返すわたし。

「いやだって、カレンダーに『My Birthday』って
書いてあるから。」

そう言って部屋の柱に掛かっている日めくりカレンダーを指差す彼。
そう言えば自分で書いたんだったなあ。
誰にも見られないと思っていたから書いたんだけど
まさかこんな形で見られちゃうなんて…ね。

「おめでとう。」

わたしがなるほど、と感じたのを確認してか
最後にもう1回わたしの顔を見ながら
嘘偽りのない笑顔でそうしてくれる彼。

分からない…よく分からないけど
いろんな感情が体中から溢れ出していた。
おめでとう、なんて誰からも言ってもらえないと思ってた。
それがついさっき会ったばかりの、まだ良く知らない彼からの言葉であったけど
何故だかわたしの心にずっしりと突き刺さり
その感情は自然と涙となって溢れ出していた。

「え、え、え！？
俺なんかいけないこと言った？
ご、ごめん！」

わたしが泣いてしまったのが自分のせいだと感じて
困ったような顔でオロオロする彼。
ほんと心の中は子供なんだなー、と思っちゃった。

「ううん、違うの。
ちょっと目にゴミが入っちゃって…。
ごめんね…。」
「そ、そっか。」

何故だかその場に正座している彼は、そう言って安心したような顔をした。
溢れ出す涙を制服の袖で拭う。
頭の中では彼の「おめでとう。」がまだ
優しい響きと共に残っていた。

…と、感傷に浸る間もなく
その反芻に割り込むかのように聞こえてきたのは、
グゥ〜…っと言う『お腹がすいたの合図』だった。

隣の彼の顔を見る。
全く動揺の色は見えなかったけど
少しだけ照れているようにもわたしには見えた。

「…ふふ。」

思わず笑ってしまう。
それが今日初めての心からの笑いであることに
そのときふと気づいた。
そんなわたしを見て彼も少年のような笑顔で笑う。
そう言えばって感じだけど
わたしもまだ夕飯食べてなかったんだよね。

「よし！」

立ち上がり、キッチンに向かう。
今日はわたしの誕生日だもん。
ご馳走食べないで寝るなんてありえない。
この日のために大好物のカルボナーラを作る材料を
ちゃんと買い揃えておいたんだった。
当初は1人で食べる予定だったけど
運よく多めに買っておいたから、全く問題なかった。

わたしが料理をしている最中
彼は珍しいものを見るように
興味津々と言った感じでわたしの周りをウロウロしていた。
キラキラと光るその瞳は
何の汚れも知らない少年のような輝きを放っていた。

出来上がったカルボナーラを2人で食べる。
彼は本当に幸せそうな顔をして「おいしいおいしい。」と言って食べてくれた。

明日からのことを考えると、頭が痛くなるほど不安になる。
彼をどうするのか、と言うのももちろんあるけど
一番は学校のこと。
今までも毎日が不安続きだったけど
デパートの件があって更に不安になってしまった。

…でも今日くらいは何もかも忘れてしまおうと思った。
なんでこんな人と誕生日を過ごしているんだろうと
深く考えれば何がなんだか分かんなくなってしまうけど
とりあえず今この一時が
わたしにちょっとした幸せを与えてくれているのは紛れもない事実だと
確信を持って言える。

目の前でわたしの料理をほおぼる彼。
そんな彼を見つめるわたしは今
いったいどんな顔をしているのだろう。
…などとやっぱり深読みをしてしまう自分自身を今だけは制御して
わたしは無心でカルボナーラを口に運んだ。

もしかしたら今までで一番
幸せな誕生日だったかもしれないな。

…わたしは1人

そんなことを思っていた。

朝。

辛うじて差し込んでくる朝の光と
すずめのさえずりの追撃によって、否応なしに目が覚めた。

上体を起こす。

時計を見て8時を少し過ぎているのを確認し
マズイ！と一瞬心臓がビクッとするのを感じたが
すぐに今日は休みだと言う事に気づき、吐息を付きながら胸を撫で下ろした。

頭がまだ重く意識がはっきりしない。

掛け布団を10秒ほどボーっと見つめてから
わたしはやっと大事なことを思い出した。

彼の姿を探す。

部屋中探してもその姿を見つけることができない。
ベッドを飛び出して玄関に向かう。
彼はいない。
でもドアの鍵にはしっかりと鍵が掛かっていた。
玄関へ向かう途中にトイレとお風呂場も確認したけど
そこにも彼の姿は確認できなかった。

おかしいな…。

不安になりながら部屋に戻る。
わたしは心臓が跳ね上がるのを感じた。
すぐに彼の姿が視界に入った。
…彼はベッドの上でわたしに背を向けて眠っていた。

頭が真っ白になるわたし。

…横で一緒に寝てたってこと…？
一気に眠気が吹っ飛び混乱するわたし。

昨日の夜のことを思い出す。

2人で夕食を食べた後…全く記憶がない。
相当疲れていたせいもあると思うけど
おそらく急激に眠気に襲われて気が付いたら寝ていたように思う。

…まさか…ね。

って言うかわたしちゃんと服着てるじゃん。

もしそんなことがあったら、さすがに服脱いだことくらい覚えてるだろうし

それすら覚えてないのなら、ちゃんと服着てるのはおかしいし。

…しかも彼は記憶をいろいろと失くしてしまっていて

おそらく精神は小学生レベル…もしかしたらそれ以下。

大丈夫大丈夫、気にすることない。

胸のドキドキは隠せなかったけど

そんな低すぎる可能性を心配するのは止めようと思った。

ベッドに向かう。

向こう側を見るような格好で寝ている彼。

この隣で寝ていたのかと思うとやっぱり動揺は隠せないけどさ。

わたしは邪念は振り払って彼を起こそうとした。

「朝だよ！起きて！」

そう言って掛け布団を勢い良く彼から取り去った。

…目を疑った。

そこには何故か素っ裸の彼が眠っていた。

プリンとしたお尻がこっちを向いている。

…なん……で？

目をそらすことも忘れてただその異様な光景を

じっと見つめるわたし。

掛け布団を奪われ体に冷えを感じたのか

「うーん…」と言ってうなると

彼はゴロンとわたしの方に寝返りを打った。

…朝もはやから見てしまった。

ポロロンと飛び出るおちんちん。

動きや行動は少年そのものだけど

おちんちんとその周りにしっかりと生えた毛が

彼がもう大人であることを物語っていた。

ブルブルッと大きく震えると
寒さに耐えられずに体を起こす彼。
なんで…なんで…。

「なんで…裸なの？」

おはようと言う前にわたしはすぐさまそのことを問い詰めた。
大きなあくびをしながら彼は「ほえ？」と
まだ夢の半ばと言った様子。

「…だからなんで裸なの！？」

できるだけ彼の方を見ないように
でも確実に彼の方を見ながらわたしは少し強めにそう訊いた。
少しびっくりしたように大きく目を開けた彼は
自分のあられもない姿をようやく確認し「ああ。」と言呟いた。

「いや、寝てる最中にさ。
ちょっと暑くなっちゃって。
でも掛け布団取ろうにも隣でお前が寝てるし。
しょうがないから服脱いだんだ。」

淡々と語る彼。
大事な部分を隠す気はサラサラないご様子。
更に彼がベッドの脇をゴソゴソと漁ると
間違いなく昨日わたし自身が決死の思いで購入してきた衣類たちが
脱ぎたてのようなクチャクチャの状態で見えた。
はあ、もう…。
常軌を逸した彼の回答に少し眩暈がしたけど
そこはなんとか自重した。
…って言うかわたしを呼ぶときの2人称は『お前』なのね。
まあ別にいいけどさ…。

「…あ、そう言えば
ちんぽ嫌いだったんだっけ。」

…ごめん。」

そう言って慌てておちんちんを両手で隠す彼。

「…いや別に！

き、嫌いってわけじゃなくて…。」

当たり前だけど好きとも言えずに
完全に言葉を失うわたし。

「なんだ、そうなのか。」

わたしの言葉をいいように汲み取ったのか
彼は何の躊躇もなく隠した両手を即座に離した。
ボロン。
結局わたしの視界にはおちんちんが入ってくるのね…。

…そ、そんなこと気にしている場合より
とりあえずわたしには確認しておかなきゃならないことがある。

「…あ、あのさ。

昨日の夜のことなんだけど。」

「ん？」

「2人でカルボナーラ食べたじゃない？」

「ん、あああれか。

うん、食ったぞ、すげー美味かった。」

「あ、ありがと…

で、で！その後なんだけどさ。

わたしたちって…どうしたっけ？」

自分でも質問の内容が抽象的過ぎて恥ずかしくなったけど
それ以外に質問の方法がないような気もした。

「どうしたって…覚えてないのか？」

気のせいかもしれないけど

急に彼の声が真剣になったような気がして
わたしは思わず大きく唾を飲み込んだ。

「覚えて…ない。」

ドキドキしながら受け答えするわたし。
まさか…ね。

「あの時間帯にやることなんて言ったら
1つしかないじゃないか。」

満面の笑みでそう告げる彼。
心臓が大きく跳ね上がる。
昨日の夕食のときみたいな感覚でこの笑顔を見ていたのなら
少年のような屈託のない笑顔だなあと感じていたんだろうけど
このような状況下でこんな笑みをこぼされると
「昨日はいい夜だったね。」と告げる
性欲に満ち溢れた野獣の笑いにも見えなくもなくなってしまった。

きっと次の彼の答えが確信的なものになるんだろう。
嘘だよね…そんなことあるはずないよね…
でももしかしたら、わたしのヴァージンが…
そんなことが頭を錯綜し、いても立ってもいられなくなり
耳をふさごうとした瞬間。

「お前が1人で勝手に寝ちゃったんだよ。」

サラッとそう言う彼。

「…え？」

1人？…ってことは
何もなかったってこと…？

「…ホントに？」

「うん。」

「…それだけ？」

確認のためにしつこく確認するわたし。

「何をそんなに疑ってんだ？」

カルボナーラを食べ終わってすぐ

片付けもしないでベッドに寝転がっちゃったんじゃないか。

言っておくけど俺が食器とか全部洗ったんだかな。」

そう言ってキッチンに移動し

自分が洗ったと言う食器を1枚手に取って

わたしに見せ付けてくる彼。

…当たり前だけど、おちんちんブラブラさせたまま…ね。

頭からも完全に眠気は吹っ飛んでいて

改めて男の人が素っ裸でわたしの部屋にいると言う

異様なシチュエーションを実感し

顔が紅潮していくのを感じたけど

とりあえず今はそれを悟られまいと

「…ありがとう。」

と、感謝の意を述べた。

分かったならよろしいと、えっへんと言った感じで胸を張る彼。

「…その後は君はどうしたの？」

一応確認しておきたかった。

しつこいと思われたらうけどさ、わたしとしても重要な問題だし。

「食器洗ってすぐ寝たよ。

床で寝ようと思ったけど寒かったしさ。

大きめのベッドっぽかったから2人でも大丈夫かなーと思って

横に入らせてもらったんよ。

…あ、もしかしてまずかった？」

頬をぼりぼりと掻きながら

不安そうな顔を向けてくる彼。

「いや…別にそれはいいんだけど…さ。」

普通の人だったら大問題だけどね。

彼には記憶がないし、何より見た感じだと

性欲みたいなものも忘れてしまっているみたいだから

問題ない、と言う事にした。

…ってことはこれから先、彼が記憶を取り戻したり

何か進展があるまでは

2人でベッドで寝ることになる…のかな。

そう考えるとドキドキしたけど

わたしさえしっかりすればたいした問題じゃない…よね。

「…でも良かったー。

何もなくて。」

わたしはとりあえず安心することができ

独り言のようにそう呟いていた。

完全に信用できるような証拠みたいなものはないけど

彼が嘘を言っているようには見えなかったし

そこを変に疑ったりするのは止めようと思う。

「寝てるお前に

俺が何をするって言うんだよ。」

彼は変なのーと言った感じで不意にそう言うと

ハハハ！と純粹に満ちた顔で笑った。

その笑顔を見て

自分だけがあらぬ方向のことばかりを考えていたことに

無性に嫌気が差した。

と同時にわたしも大人になったんだなと

もの凄く恥ずかしくなってしまった。

「…うるさいなあ！

知らないよそんなの！」

そう言ってずっと手に持っていた掛け布団を
素っ裸の彼のおちんちん目がけて投げつけるわたし。
自分でしたことなのに少しびっくりしたけど
せめてもの照れ隠しとしての暴挙だった。

その掛け布団は、見事彼の股間にクリーンヒット。
「うおっ」っと小さく声を上げて腰を引く彼。

「くそー！やったなあ！」

そう言って笑いながらわたしを捕まえようと追いかけてくるわたし。
迫る彼と、揺れるボーボーのおちんちん。

「きゃー！」

わたしは幼い子供が節分の日に鬼に追いかけられ
恐怖のあまり発するかのような奇声を出しながら
部屋の中を逃げ回った。
狭い6畳の部屋でわたしたちは
馬鹿みたいな追いかっこを始める。

素っ裸の男の人に追いかけて、逃げ惑う女。
傍から見たら現行犯逮捕可能な光景だけど
わたしはそんな恥ずかしいおふざけを
自分でもびっくりするくらいに楽しんでいた。

時計の針は9時あたりを指している。
今日はまだ
始まったばかり…。

午前中は彼と2人でテレビなどを見て過ごした。
やはり2人きりだと思うと
無条件にドキドキしてしまう。
今はちゃんと彼は服を着ているから普通に直視できるんだけど
普通の1人の男の人としてみたら
イケメンとまではいかないまでも
それなりに格好いい部類に入る顔立ちだったので
1人の女として、動揺は隠しきれなかった。

昼ごはんもわたしが作った。
普段自炊してるのがこんなに早く役に立つなんてね。
彼はおいしいと言って食べてくれる。
きっとどんな料理を出しても
無条件においしいと言ってくれるんだろうな。
良く分かんないけど
彼からはそんな優しさがにじみ出ている。

今日は夕方からバイト。それまでは暇。
彼もわたしも何も言わないけど
今後どうするかについてまだ何も話し合っていない。
彼としては記憶を失っているわけだから
どうすることもできなくて
きっとわたしにすぎることしかできないんだろうけど
いつまでもこうしているわけにもいかない。

「何か思い出したこととかない？」

わたしが訊くと

「うーん…全く。」

と渋った顔で彼は答えた。

記憶喪失というものが何故起きるのか。

わたしはそういう事について学んだことがないから
専門家みたいにうまいこと原因や糸口を見つけることはできないかもしれない。
とりあえず今は自分の思っている意見を彼に告げようと思った。

「えっとね。
とりあえず記憶を失ってしまっている以上
1人で家に出たりすることは危険というか不安だと思うの。」

わたしの言葉に真剣になって頷く彼。
気がつくとは彼はまた正座をしていた。

「だから一応記憶が戻るまでは、ここに住んでもいいことにする。」

なんか凄い上から目線の発言だけど
実際問題今のこの状況からして上に立つべきなのはわたしだもんね。
彼はわたしのその言葉にホッと胸を撫で下ろし
安心したような表情を見せた。
出て行け！とか言われたらどうしようとか
そんな不安があったのかもしれない。
あえて訊いたりしないけどさ。

「お前いいやつだなー。サンキュー。」

そう言って微笑みかけてくる彼。
胸がドキッと跳ね上がる。
昨日「おめでとう。」と言われたときにも少し似た感情。
言われ慣れない言葉を言われたせいなのかな。
この感情の本当の正体に
わたし自身このときにはまだ気づいていなかった。

話は今後2人で住んでいくにあたっての
ルール決めへとシフトしていた。
…といってもわたしが一方的に彼に押し付ける
この家での決まりの発表会みたいなものだけだね。

「とりあえず、家の中でも基本的には服を着ること。」

「…寝るときもか？」

「もちろん！」

「ちえー。」

本当に残念そうにそう言う彼。

男の人で全裸で寝る人って良く聞いたりするけど

そんなに気持ちがいいものなのかな。

…今度やってみよう…かな。

とか変なこと考えているわたし。

「それからお風呂に入って上がってくるとき

ちゃんと脱衣所で服を着てから出てくること。」

「えー、風呂上りの全裸気持ちいいのに。」

「知らないよそんなの！」

とりあえずこれだけは守ってね！絶対。」

「むう。」

「返事は！？」

「…はい。」

なんか本当にお母さんになった気分。

残念がってみたりむすっとしてみたり

本当に小さな男の子みたいだなー、と思った。

1番大事なことはザッとこんな感じかな。

まァつまりはわたしの前でおちんちん丸出しにするような

恥ずかしい真似はやめてねってことで。

わたし自身毎回あんな恥ずかしいもの見ていたら

心臓が持たなくなってしまうって言うのが

1番の理由。

でももしかしたらそれ以上に

おちんちん丸出し状態でいられることで

わたし自身女として見られていないような気になって

ちょっと変にプライドが傷つけられているような感覚に

陥っているのかもしれないな、とも思った。

その他に決めたのは
朝起きたら洗濯機くらいは回して欲しいということ。
洗剤を入れてスイッチを押すだけだから
これくらいできるでしょ、と言う
完全に彼を子ども扱いしているわたしのかなりなめた任命。
できれば干すところまでやって欲しいと言う、応用課題も沿えて。
それから部屋のものは基本的にはいじって欲しくないけど
わたしの許可を得れば手にとっても問題ないこと。

その他、トイレでは基本的に便座に座って用をたすこととか
逆にお風呂の順番は男の人を立てる意味で彼から入っていいよ、とか
細かいことも含めるとかなりの数のルールを決めた。
彼はわたしの言葉にウンウンと正座をしながら
1つずつしっかり頭に刻んでいくように頷いていた。

最後に、寝るときはしょうがないから
ベッドで寝てもいいということも告げた。
これを言うときにわたし自身がちょっと恥ずかしくなって
顔が赤くなっていくのを体温で感じたけど
彼はちっとも気にしていない様子で
「おう、分かった。」と真剣な顔で了解していた。
…もう、無駄に緊張しちゃったじゃん。

一通りルールも決まったときには
もう3時頃になっていた。
結婚したらこういう夫婦間のルールって
凄い重要になってくるんだろうな。
なんか人生勉強してるみたいな気分。

そろそろバイトの時間か…。
帰ってくるのは夜10時過ぎ頃。
それまで彼はこの部屋で1人で過ごすことになるんだろうけど…
正直不安でいっぱいだった。

家にあるのはテレビとパソコンとちょっとした漫画くらい。
ネットがあればある程度時間は潰せるだろうけど
パソコンの中には結構見られたくないファイルとかも
恥ずかしながら結構入っているので
勝手にパソコンを起動しないって言うのも
さっきのルール決めの際に話しておいたんだ。

「わたしこれからコンビニのバイトに行かなくちゃいけないんだけど…
大丈夫かな？」

不安そうに訊くわたしを不審に思ったのか

「ん？なんでだ？」

と聞き返してくる彼。

「帰ってくるの10時過ぎになっちゃうけど
それまで留守番してられる？」

完全に馬鹿にしてしまってる言葉遣いに
さすがのわたしも言い過ぎかな？と感じてしまった。

「そんなにかあ、バイト大変だな。
まあ俺も一応大人だしな、大人しく時間潰して待ってる。
いろいろ思い出せるよう頭働かせてみるよ。」

そう告げる彼の目を信じ
わたしは安心してバイトに行くことが…
できると信じてバイトに行くことにした。
さすがに昨日会ったばかりの名前も知らない人だもん。
ちょっとは心配になるのが当然でしょ。

「さっき話したルールの範囲内なら
何してもいいからね。」
「あいよー。」

完全にわたしの部屋に溶け込んだ彼の軽い返事を聞いて
わたしはバイトに向かった。

バイト先のコンビニは
家から自転車で 15 分ほど離れた場所にある。
学校の人が来るかもしれないと
始めた当初はそのことが心配で緊張しっぱなしだったけど
続けていくうちに学校からかなり離れているし
ほとんどの人が高校には電車で行っているから
ここにくる可能性は極めて低いな、と
最近では安心してきっていた。

基本的にコンビニのバイトって
他のところと比べて結構ゆるゆるだと思う。
入退店時の挨拶とかも、さほど厳しくしつけられないし
とにかく、ものをちゃんと売っていれば
問題なしと言った感じ。

一応わたしはバイト中
極力接客も自分なりに納得いくくらいのレベルでこなし
顔もできるだけ笑顔で対応するように心がけていた。
もちろん作り笑顔だけどさ。
こういうところで笑っとかないと
本当に笑うときなんてほとんどなくなってしまう。
そう言う意味ではバイトの存在はわたしにとって
日常生活の中でなくてはならないもの
なっていたりした。
…お金が必要っていうのが
もちろん一番重要な要素ではあるけどね。

今日もいつものようにレジ打ちをしていたけど
やっぱり彼のことが気になって仕方なかった。
6 時間もの長い間、自分の部屋を彼 1 人に任せるってことに
不安を抱いていたのと同時に

ちゃんと留守番できているかな…と言う
母親的な視線での不安も少なからず持っていた。
でも、いつもよりバイトに力が入っていたのは
家に帰ったら誰かいる、彼がいる、1人じゃない！と言う
無条件で訪れるであろう彼との時間があるからだと言うことに
自分自身でも気づいていた。
表面上の孤独からの離脱かもしれないけど
1人のときが長すぎたせいもあって
その人が大切な存在とは言えないような人であっても
いてくれると言う事実は単純に嬉しかった。

その日夜 10 時からのシフトの人が
わけあって少し遅れると言うことで
店長からのお願いでその人が来るまで延長して働くことになった。
彼のことが心配だったけど
断るに断れず、お願いに応じることに。
結局その人が来たのは 11 時頃で
1 時間も残業をすることになってしまった。

急いで自転車を飛ばして家に帰る。
大急ぎで帰ったので 10 分くらいで着いた。
家の前に自転車を止めドアの前に立つ。
え？
明らかな違和感がわたしを襲う。
高鳴る鼓動を抑えつつドアの取っ手を握る。
嫌な予感的中。
ドアは開いていた。

頭痛がするのを必死で我慢して部屋に飛び入る。
…彼の姿はなかった。
なんで？外に出ないでって言ったのに。
満面の笑みでわたしの要求に首肯してたのに。
あれは全部嘘だったの？
記憶喪失とか言うのも、全部嘘？演技だったの？

考えれば考えるほど、嫌気が差すような発想しかでてこない。

結局わたしは裏切られるのか…。

結局わたしは1人ぼっちなのか…。

今まで受けてきた仕打ちを思い出して

体中が小さく震えだしていた。

…でも信じたくない。

きっと何かあったんだよ。

彼のあの純粋な瞳の輝きを思い出す。

嘘をついてると思うほうがおかしい。

何の躊躇いもなく彼を信用した自分を信じたい。

2つの感情を頭の中で対峙させながら

わたしは部屋の鍵もかけずに外に飛び出していた。

この近くは都会の中の一角にあるちょっとした田舎と言った感じで

ちょっと足を運ばないと買い物もできないし

駅に行くには歩きだと30分くらいかかってしまう。

まあ財布を持ってなかったから

電車に乗った可能性はかなり低いとは思うんだけど…。

何か思い出して、部屋を飛び出したのかな。

わたしにメモ書きもなしに？

そんなことしてる暇もないほど重要なことを思い出したのかもしれないけど…。

とりあえずわたしは遠くには行っていないと信じ

彼が行きそうなところを手当たり次第に回った。

…と言っても行きそうなところなんて

見当もつかなかったけどね。

家から半径100mくらいの範囲内を

わたしはとにかく駆け回った。

普通こういう場面では必死にその人の名前を呼んで

泣きながらの大搜索が始まるんだろうけど

あいにく彼の名前すら知らない。

正直なところ、彼のことなんて何も知らないんだー。

息が切れるくらい走り回り
気がつくとポツポツと雨が降ってきて
それは瞬く間に勢力を増し、1分足らずで大雨へと変わった。

…もうびちょびちょだよ。
ふと横目に映る小さな公園。
わたしは抜け殻のようになった体をその公園へと向け
大きな脱力感と共にベンチに腰を下ろした。

空が泣いている。
わたしと同じで悲しいのかな。
0になる体を容赦なく打ち付ける大きな雨粒。
ここなら誰にもばれまいと
わたしは思いっきり大声で泣いてやった。

「あ！やっと見つけた！」

どれくらい泣いていたんだろう。
もしかしたら全然時間は経っていなかったかもしれない。
豪雨の音の中でその声がはっきりと聞こえた。
声のする方へ目を向けると
そこにはわたしと同じように傘も差さずにびちょびちょに濡れた彼が
わたしを見つめて立っていた。

「こんなとこで何やってんだ？」

小走りで近づいてくる彼。
それはこっちの台詞だよ、と言いたかったけど
涙で溢れて声にならなかった。

「…泣いてる…のか？」

すぐにわたしの様子を不審に思い

目の前にしゃがみこんで顔を覗いてくる。

「…な、なんで、そ、外に出たの…？
家にいてって…言った…じゃ…ん。」

絶え間なく溢れ出る涙を止めることができず
必死で質問を投げかける。

「…いや…
10時にバイト終わるって言うから、それまでは待ってたんだけど
11時になっても帰ってこないからさ。
その、心配になって探しに行ってたんだ。
コンビニって言ってたし、近くのコンビニを中心に…」

わたしの目をじっと見つめながら
真剣なまなざしでそう言う彼。

「…やっぱりまずかったかな。
ごめん。」

申し訳なさそうにその場で頭を下げる彼に
わたしはどうしていいか分からなかった。
…でも、裏切られたわけじゃなかったんだと言う安心感が
一番大きな感情として、わたしの中に入ってきた。

「別にいいけど…さ…。
せめてメモ書き…とか…さ…
残してって…くんないと…さ…。」

安堵の涙なのかそれとも別なのか、もう良く分からなかったけど
とにかく泣きじゃくりながら、わたしは彼に訴えた。

「分かった、ごめん。」

そう言ってもう1度謝る彼。
雨は更に大降りになっていた。

体中に冷えが走るのを肌で感じる。

「とりあえず、帰ろう。」

彼の方からそう言ってくると
しゃがんだまま、わたしに背を向けた。

「…な…に？」

「おーんーぶ。」

「え？」

「だからぁ。

おんぶしてやるから、早く乗りな。」

彼がどんな顔をしてそう言っているのかは分からなかったけど
きっと何の恥じらいもなくそう言っているんだろうなと
想像はできた。

わたしはただ彼の言葉に甘え、体を彼に預けた。
そのときに気づいたけど、彼は裸足だった。
そう言えば靴持ってなかったんだもんね…、ごめんね…。
出来るだけ早く買って上げなきゃと、胸の中で小さく誓った。

…おんぶなんてしてもらったのいつぶりだろう…。
すぐに思い出せないから相当前なのは確か。
大きな背中に身を委ね、わたしは終始ドキドキしていた。

わたしを心配して探しに出てきてくれた彼。
その行動がどういう感情からきたものなのかは分からなかったけど
わたしとしては、ただ嬉しかった。

彼の背中に顔をうずくめ、ふと思った。
わたし…この人のことが
好きなのかも知れない。

玄関の前に辿り着く。

「降ろすぞ。」

その言葉に「…うん。」と言呟いた。
心臓がまだドキドキしている。

「…とりあえず風呂入んないとな。

このままだと風邪引いちまう。」

「うん…。

あでも、まだお風呂沸かしてないや…。」

「大丈夫！」

「え？」

「そろそろ帰ってくる頃だろうと思って

俺がさっき沸かしておいた。」

「…あ、本当に…。」

「…まずかったか？」

「…うん全然！ルールなんて所詮ルールだから！

自分が正しいと思ったことは全然やっちゃって構わないから。

…ありがとう。」

「そか、良かった。」

わたしの言葉にいちいち一喜一憂する彼に
わたしはいちいちドキドキしていた。
今日の朝あたりまでそれほど意識してなかったのに
今は過剰に意識してしまっているわたしがいる。
間違いない、わたし、好きになっちゃった…。

びちょびちょの体のまま玄関にあがる。
置いてある靴に雨粒が垂れ落ちないように
わたしたちはドアに背もたれながら身を固める。

「…お前から先入っていいぞ、風呂。

…と言うか俺がとやかく言える立場じゃないけどな。」

自分の立場は分かっていると言わんばかりに
謙虚な姿勢で先風呂を勧めてくる彼。
でも簡単にこのまま彼を玄関に何分間も放置させておけるほど
わたしは冷徹な人間でもなかった。

「でも…それじゃあなたが風邪引いちゃうし…」

あなた、とか呼んでる自分自身に
この期に及んで恥ずかしくなってしまった。

「俺は大丈夫だよ。」

「いやでも…」

「大丈夫大丈夫。」

全く問題なしといったように体を揺する彼。

「…じゃあ、一緒に入ろ！」

まさか自分からこんな言葉が出てくるなんて思わなかった。
一緒に入る…？お風呂に？彼と？
そんなこと…

「いいのか？」

さすがにそれはまずくないか？」

そう言って真剣な顔でわたしの顔を覗いてくる彼。
あんなんだし、わたしはてっきり「そうするか。」と乗ってくるかと思っていただけに
不意を突かれたみたいでびっくりした。

「…なんで？嫌なの？」

それとも、恥ずかしいの？とも訊こうかと思ったけど
率直過ぎるかと思って喉のあたりで止めておいた。

「いやそうじゃなくてさ、2人で入るには…その…」

せま過ぎないか？あの風呂場。」

…え？そんなこと！？

あまりにも単純明快な返答に拍子抜けしてしまった。
と同時にドキドキしていた自分が馬鹿らしく思えた。

「…うるさいなあ！

浴槽には交互に入ればいいでしょ！

ほら、さっさと入るよ！」

わたしは靴を脱ぎ、彼の手を引いて脱衣所へと向かう。

「…何怒ってるんだよ。」

彼の困ったような声が耳に入ってくるのが分かった。
ごめんね、恥ずかしいだけなんだ…。

脱衣所に入り鍵を閉める。

当たり前だけど心臓の鼓動は跳ね上がっていた。

乗りで一緒に入ることになっちゃったけど

どうしよう…彼の顔を見ながらわたしは身動きできなくなっていた。

「んじゃ、入るか！」

お風呂に入れることを喜ぶ男の子のような笑みをこぼす彼。

「う、うん、そうだ…ね。」

「風呂入るときはさ、ちんぼ隠さなくていいんだよな？」

彼が訊いてくる。

当たり前だけど2人でお風呂に入るときのルールなんてものは
決めてなどいなかった。

駄目！なんていったら悲しむかな…と彼の気持ちになって考えて

「う、うん！いいよ！」

と返事をしてしまっていた。
その言葉を聞き、一目散に服を脱ぎだす彼。
体中が雨で濡れているせいもあって、なかなか脱げなさそうだった。
なんかその光景が妙にじれったくて
若干興奮してしまっているわたし。
…何考えてんのもう！変態じゃんわたし…。
脱いだ服を洗濯機の中に入れていく。
あっという間にパンツ1枚姿になり
ちょっとは躊躇うのかな？と思ったけどそんなはずもなく
最後の1枚を一気に脱ぎ捨ててしまった。

ものの30秒足らずで生まれたままの姿になってしまった彼。
やっぱり視線がいてしまうおちんちんは
今日の朝見たときよりも気持ち小さめになっているような気がした。
…なんて言えればいいだろう…縮こまっちゃってる感じ？
彼の大きな体には不釣り合いなくらいちっちゃく感じて
なんか…可愛かった。
当たり前だけとおちんちんの毛もしっとりと濡れていて
…なんて言うのかな、凄く…エッチだった。

「どうしたんだ？顔真っ赤だぞ？」

ずっとその光景を見ていたわたしはその言葉でハッとした。
顔を上げるとすっぽんぽん姿の彼が目の前に近づいてきている。

「熱でも出ちゃったか？どれ…」

そう言っておもむろにわたしのおでこに自分のおでこを
くっつけてくる。
本当にすぐ目の前に彼の顔が映る。
たぶん生まれてから過去最高値の心拍数を観測した瞬間。
…しかも、すっぽんぽん姿だし…彼。

「だ、だだ、大丈夫だよ！ちょっと疲れちゃっただけ！
ほんとにその…大丈夫だから…！」

完全に狼狽しながらそう言うと、彼を軽く突き放すわたし。
変なのーといった感じで彼は首を傾げる。

「んじゃ、先入ってるぞ！」

そう一言告げると隠す気はサラサラないと言った感じで
大事な部分をぴょこぴょこと揺らしながらお風呂場に消えていく彼。

お風呂場のドアがバタンと閉まりシャワーの音が聞こえてくる。
透明なモザイクガラスの奥で
彼がシャワーを浴びているシルエットが浮かび上がって見えた。
大事な部分だけ真っ黒に見える。
それを見ただけでもドキドキしてしまっている自分に
若干の焦りを覚えた。

脱衣所の鏡を見ると真っ赤な顔をしたわたしが映っていた。
そりゃ熱出してるようにも見えるよね…。
昨日初めて彼の裸を見たときももちろんドキドキしたけど
今はそれに更にプラスアルファするかなのようなドキドキが加わって
もうなんだか分かんない感情になってしまっていた。
だって好きになった人のおちんちんを見ちゃってるんだもん…。

タオルかけにバスタオルが複数枚掛けられているのを確認し
わたしは服を脱いだ。
ドア越しとは言え男の人が近くにいるところで裸になるのは
やっぱり抵抗があった。

パンツも脱いで素っ裸になり
すぐさまバスタオルで体を巻いた。
なんでタオルなんて巻いてるんだ？とか言われるだろうけど
恥ずかしいんだもん…こればかりは仕方ない。

わたしは準備が整ったのでドアの前で大きく深呼吸を1つして
お風呂場に入っていった。

彼は体をくるくる回転させながらシャワーを浴びている最中だった。

すぐに目に入ってきたムッチリしたお尻に
抑えようとしていた胸はいとも簡単に心拍数を上げた。

「なんでバスタオルなんて巻いてるんだ？」

わたしの姿を確認し、全く予想通りの感想を述べてくる彼。
彼の深層心理が読めるようになってしまったかもしれない自分に
少しおかしく思えてしまったけど、そんな余裕もあまりなかった。

「…恥ずかしいんだからしょうがないでしょ！
普通の人は、異性の前で裸になるのを恥ずかしがるものなの！」

そう言って彼の後ろを通り、浴槽に浸かる。

「ふーん、変なの。」

そう言って蛇口をひねり、シャワーの水を止める彼。

「え？もう終わり？」
「うん、もう十分汗落としたし。交代。」
「ちゃんとシャンプーで頭洗った？ボディソープで体洗った？」
「いいよおめんどくさい。」
「何言ってるんのお！ちゃんと洗わなきゃ駄目！」
「えー。」

ちょうど視線の高さに見えるおちんちんを
極力見ないように、わたしは彼に訴えた。
きっと昨日も水だけ浴びて出てきたんだろうな。
全くしょうがないんだから…

「わたしが洗ってあげるから！その椅子ここにおいて座って。」

顔が一層赤くなるのを感じつつ、そう言ってわたしは浴槽から出る。

「へいへい。」

彼は若干めんどくさそうにそう言うとなたしの指示通りに椅子に座った。

彼の後ろに立ちシャンプーを手に取り
まず頭を洗い始める。

「わぁ、くすぐってえ！」と子供のようにはしゃぐ彼。
本当にもう…お母さん気分になったり、ドキドキさせられたり…
わたし翻弄されっぱなしだな。

シャンプーが終わってリンス。
「くすぐったいところない？」と、本当はドキドキの感情を悟られないように
彼に質問を投げかけるアドリブも効かせてみる。

「ふー、気持ちいいなあ！」

頭を洗い終わると、爽快爽快と言った風に頭をブルブル振る彼。

「体は自分で洗えるよね？」
「うーん、気持ちいいから続けてやってくれると嬉しい。
お前洗うの上手いし。」
「えー！？」
「…あ、嫌なら自分でやる。」
「…わ、分かったよ。…洗ってあげるよ。」

結局全部わたしがやることになるのね。
ボディソープをボディタオルにつけて彼の背中から洗い始める。
触れた第一印象は凄く温かくて人肌ってやっぱりいいなあと感じた。
と同時に大きな背中は凄く頼りがいがあるって、やっぱりドキドキしてしまった。
…いちいち見るもの触れるものにドキドキしたんじゃ
身が持たなくなってしまうよ…と高鳴る胸に手を当てて改めて感じた。

後ろ向きのまま背中、腕、太もも、足と洗っていく。
彼は終始幸せそうに口笛を吹いている。曲名までは分からなかった。

「よし！」

わたしが終わったよ、と言う合図を込めてそう言う

「ちんぽは？」

と単刀直入に顔だけわたしに向けてそう言ってきた。
…訊かれたらどうしようかと思ってたところなのに。
洗えるわけないじゃんね、男の人のおちんちんなんて…。

「それくらい自分でできるでしょ！」

「ちえー。」

落胆したように自分のおちんちんを見ながら俯く彼。
もう…分かったよ。
何が分かったのか自分でも分からなかったけど
もうここまできたらどうにでもなれと言う気になってしまったのかもしれない。

「分かった。」

わたしは一言そう言うと言とボディソープを手に取りなじませ
後ろ向きの彼に後ろから抱きつくような姿勢になった。
そのまま目を閉じて自分の手を彼のおちんちんに向けて伸ばす。

…ぷにゅっとした感触がわたしの手を伝い、脳を刺激した。
おちんちんってこんなに柔らかいものなんだ…。
わたしは素手で彼のおちんちんを触っていた。

「あはは！くすぐってえよー。」

「う、うるさい！洗ってあげてるんだから文句言わないの！」

「へいへい、くくく。」

楽しそうに幸せそうにそう笑う彼。
自分がおちんちんを触られていることなんか
全く恥ずかしく思っていないようにしか見えなかった。

おちんちんの棒状の部分洗った後、タマタマの袋を洗う。
本当にちゃんと2つタマタマが入っているのが

本当の意味で手に取るように分かってしまった。
タマタマの袋はたぶん彼の体の中で一番柔らかくて薄い印象を受けた。
背中越しに目を閉じながらだったから実際には見てなかったけど
今まで彼のおちんちんを見てきたとき以上に
実際に触ることで形状や大きさを完璧に把握することができてしまい
それを頭の中で想像し、1人どうしようもないくらいドキドキしていた。
このあたりからかな…わたしの下半身は
今までに味わったことのないような感覚に包まれていた。

最後におちんちんの毛を洗って全過程終了。
当たり前だけど、ちぢれてた…。どうでもいいか。
終わった頃には体中から汗が噴出しているのが分かった。

「…終わったよ。」

背中越しに告げるわたし。

「サンキュー！すげー気持ちよかったー！」

満面の笑みでそう言ってシャワーで洗い流す彼。
改めて思ったのは、本当に恥ずかしいといった感情を
失くしてしまっているんだなあ、ということ。

「ねえ、1つ訊いてもいい？」

湯船に再び浸かりながら、彼に訊く。

「なんだ？」

「今わたしが君の体をくまなく洗ったわけだけど
そのときに恥ずかしいなあとかドキドキするなあとか
何かいつもと違う感覚にならなかった？」

「うーん。別に。」

と言うかその『恥ずかしい』って言う感覚が
いまいち分からないんだよな。
忘れちゃってるだけかもしれないけど…。
あ、でもすげえ気持ちよかったぞ！」

「…そっかあ。」

やっぱりそれは記憶障害から来るものなんだろうな。
確信はできないけど、やっぱりおかしいもん。

「じゃ、じゃあ逆にさ。
異性の人の…例えば、例えばね！
わたしの裸姿を見たいとか、触ってみたいとかは
思ったりしない？」
「うーん…。
触ってどうするんだ？」

予想通りの答えにため息を漏らす。

「そっか…
普通の男の人はね。女の人の裸を見たいとか
触ってみたいとか、抱きしめたいとかいった感情を
持つものなの。」
「そうなのか…。」

わたしの話を不思議そうな顔で見つめる彼。
彼の体にはもう泡は残っておらず、洗い流し終わっているようだった。

「…ちょっと試してみてもいいか？」

彼はシャワーの水を止めおもむろに立ち上がると
湯船に浸かっているわたしの手首をつかみ
強い力でわたしを洗い場へと連れ出した。

何するの！？と思ったら
彼はいきなりわたしを自分の胸に近づけ
バスタオル1枚巻いただけのわたしを、優しく抱きしめた。

わたしの頭は半ばパニック…。
いろんな感情が交錯して…
とにかくさっき観測された過去最高の心拍数を

簡単に塗り替えていったのは確かだった。

温かい体温がわたしの体の中に溶け込んでいく。

おへその辺りに柔らかい感触があるかと思うと

それは彼のおちんちんであるとすぐに理解した。

タオル越しだけどその感触はそんなものないと思ってしまうくらい

リアルに伝わってきた。

10秒くらいそのままの状態が時間が流れた…のかな。

わたしにはそれが永遠みたいに長く感じた。

…と同時にこのままずっといても悪くないかな…とも思ってしまった。

…とか、何考えてるんだろわたし。

当の彼は小さな声でうーん…とうなっている。

「お前…すげードキドキしてるな。」

わたしを抱きしめながらそう耳元で呟く彼。

「だ、だって…。」

涙声みたいに枯れた声ををひねり出すわたし。

嬉しいのか恥ずかしいのかこんなことしていいのか…

どれも本当の感情じゃないみたいで

わたしはただ身動きが取れなくなり、彼の胸に頭をうずくめていた。

「…お前、胸ちっちゃいな。」

何を言い出すのかと思ったら

笑いながら彼はそう呟く。

…その言葉でわたしは一気に目が覚めた。

さっきと違った恥ずかしさが一気にこみ上げ

わたしは彼を両手で突き放していた。

さっきおでこをくっつけられたときよりも

確実に強い力になっていたことは間違いないと思う。

急にわたしに突き放されて

背中から壁に激突する寸前に足でブレーキをかけ、それを制止する彼。

目を見開いてももの凄く驚いている。

はぁ…はぁ…

わたしの息の乱れが無音のお風呂場でやけに響いた。

「…ご、ごめん。」

彼が謝る前にわたしの方から謝った。

どっちが悪いとか、この状況では考えている余裕がなかった。

「ちょっとびっくりしちゃって…

べ、別になんでもないから。」

「そ、そか。」

さすがに彼も狼狽の色を見せながらそう呟く。

「とりあえずあとは1人で髪洗ったり体洗ったりしたいから

先に上がって待ってて。」

「…え、俺が洗ってやるよ。

やってもらうだけなんて申し訳ないし。」

「だ、大丈夫！自分で洗うから、ね！」

「…分かった。」

わたしの強い言葉に若干違和感を覚えているようだったが

彼はわたしの指示通りに風呂場を出て行った。

1人残されたわたし。

改めて胸に手を当てて

心臓がびっくりするくらい跳ねているのを確認した。

これほどまでにドキドキしてしまうのは

彼がすっぽんぽんだったからだけではない気がした。

彼を意識してしまっている。

きっとこの感情は恋なんだろう…。

それが昔の経験から考えても間違いないということくらい

わたし自身が一番理解していた。

それと同時に少しショックを感じている自分もいた。

彼はわたしの気持ちに絶対に気づいていない。

それどころか彼はわたしのことを女とも感じていないに違いなかった。

その事実が無性に悲しくて

わたしは洗い場に立ち尽くし、気づくと静かに涙を流していた。

彼が脱衣所で着替え終わり

部屋に戻っていくのを確認したあと

わたしは体に巻いていたバスタオルを取り去った。

体が今までに味わったことがないくらい火照っている。

違和感を感じていた下半身に目をやる。

そして大事な部分にそっと手をやると

びっくりするくらいに濡れていた。

初めての体験に動揺は隠せなかったけど

きっと好きな人の裸を見て興奮してしまったからだろうと

冷静に解釈していた。

頭と体を素早く洗い

もう一度湯船に浸かる。

お風呂場の壁をボーっと見つめながら

わたしはなんとも言えない虚無感を感じていた。

お風呂から上がると彼はベッドの上に無言で座っていた。
テレビもつけていない。
わたしの姿を確認すると、彼は急に背筋を伸ばしベッドの上で正座した。
その姿に少し笑ってしまったわたし。
彼の横に腰をかける。

「正座なんてしなくていいよ。」

わたしがそう言うと彼は「あ、ごめん。」と言ひき
足を崩した。

ちょっとした沈黙が走る。
…わたしも何を言っているのか良く分からず
ただ彼がその沈黙を破るのを待っていた。

「ごめん。」

最初に出てきた彼の言葉は、謝罪の意だった。

「何が？」

「いやその…」

俺、記憶失くしてからきつといろいろおかしいことばかりしてると思うんだ。
でも良く分かんなくて
どこまでが正しいことで、どこからがしちゃいけないことなのかの判断が
全然分からないと言うか…その…」

身振り背ぶり必死で自分の意思を伝えようとする彼。
その誠実な行動に、わたしは怒るなんてことできるわけもなく
ただ胸が動かされ続けているのを感じていた。

「頑張って記憶取り戻すから
どうか見捨てないでくれ。」

そう言って頭を下げる彼。
彼としては大真面目に発した言葉なんだろうけど
それがなんだか可愛くて、ついつい笑っちゃった。

「い、いいよ。頭上げて！
全然怒ってるわけじゃないから。」

わたしが笑顔になったのを確認して安心したのか
彼も安堵の表情を浮かべる。

「わたしもできるだけサポートはしていくからさ。
ゆっくり頑張ろうよ。」

わたしの言葉に彼は

「お前本当にいい奴だなあ。」

とわたしを見つめながら言うてくる。
だから…そんなこと言われるとドキドキしちゃうんだって…。

時計の針はもう深夜1時を過ぎていた。
やっぱりドキドキで忘れかけていたけど
まだわたしたち夕飯も食べてないんだよね。

わたしは彼の視線を振り払うかのようにキッチンに向かうと
冷蔵庫の中身を確認する。
急いで帰ってきたせいもあって買い物するのも忘れていた。
これじゃ何も作れないな…。

「カップラーメンでもいい？」

申し訳ない気持ちを押し殺してわたしは彼に尋ねる。

「ああ、そういや腹減ってたんだった…。
もちろんいいぞ！

と言うか何もできなくてしてもらってばかりで
本当に申し訳ない。」

最初の頃に比べると彼も随分大人になっているのかもしれないな、と
ふと感じた。
…と言うか全然大人なんだけどね。

そんなこんなでその夜は2人でカップラーメンをすすった。
やっぱりおいしいおいしいと言って
それをほおぼる彼。
なんか傍から見てたら単純に仲のいいカップルって感じだよね。
そんなこと考えても嫌な感じが全くしなかったのは
やっぱりわたしが彼に好意を持っているからなんだろうな。
…彼自身は何を思っているのか
全く分からないけどさ。

食べ終わって歯を磨いてこの日はもう寝ることにした。
彼の歯ブラシは当たり前だけどない。
これから先長くなるのだとしたら買っておかなきゃな…と思った。
わたしの使っていていいよ、とはさすがに言えずに
彼は口をゆすいで済ませていた。
明日にでも買ってきてあげておこう…。
あと靴も…ね。

一緒にベッドに入って明かりを消す。

「おやすみ。」

わたしが言うと彼も「おやすみ。」と言う。

…当たり前だけど全く寝付けなかった。
昨日は気づいたら寝ていたらしいから、こんなことにはならなかったんだけど
やはり男の人が、しかも好きになってしまった人が
同じベッドで寝ていると言う事実は
まだまだうぶっ子なわたしにとっては刺激の強すぎるものだった。

ドキドキする胸に手を当てて
羊を数える準備でも始めようかと思っていると
隣から彼のグググといういびきが聞こえてきた。
…もう寝ちゃったのか、早いなあ。

体を彼の方へ向けてみる。
彼はわたしの方を向いて寝ていたらしく
暗闇の中で彼の顔がわたしの目の前に映った。
寝ようと思っていたのに
わたしのドキドキは更に加速し
眠気なんてものは遥かかなたに吹っ飛んでしまっていた。

…とか言いつつも彼が寝ているのをいいことに
わたしはその寝顔を真っ暗な中でじっと見つめていた。
可愛いなあ…少年みたい。
あんな立派な体なのに、いろんなところに幼い要素を持っている。

そんなドキドキする感情とは裏腹に
わたしは少しショックでもあった。
すぐに眠ってしまえると言うのは
完全にわたしを女として意識していないと言うこと。
当たり前っちゃ当たり前なんだけど、やっぱり少し寂しい。
彼を好きになってしまった以上
わたしも彼に好きになってもらいたい。
…そのためにはやっぱり彼の記憶を一刻も早く戻す必要がある。

いろいろと考えたけど、彼の記憶が戻る鍵は
『恥ずかしさ』にあるように思えてならなかった。
だって嬉しいとか悲しいとか心配だとか
他の人間的な感情はしっかりと忘れずに持ち合わせてるわけでしょ？
なんで恥ずかしいって言う感情だけが
ものの見事に抜けてしまっているんだろう。
事実的な記憶としてはほとんどと言っていいほど失くしてしまっているわけだけど
精神面での記憶の欠落はそれしかないことが
妙におかしいな、と感じていた。

いつもの孤独な日々からは考えられないほど
いろんなことがあったこの2日間。
そのなかに小さな幸せを見出していることも確かだったけど
彼のためにもこのままの状況が続けることはいいことだとは思えない。
もし彼が全ての記憶を取り戻したとき
今みたいな純粋な彼じゃなくなっていたとしたらどうしよう。
その不安はかなり大きいものだったけど
そんなこと言ってもいられない。

明日は日曜日でバイトもないオールフリーな日。
恥ずかしいけど、やってみるしかないかな…。

いろんなことを考えながら
わたしは眠れない夜を過ごしていた。

朝、目が覚める。
結局ほとんど一睡もできなかった。
当の彼はまだ隣で気持ちよさそうに眠っている。
日曜日なんていったらいつもは
昼ごろまで寝ているのが普通なんだけど
今日はどうやらこれ以上眠るのは無理みたい。

わたしは彼を起こさないようにそっとベッドから抜け出し
朝ごはんの支度をしようとした。
…といっても作る材料なんてほとんどないんだよね。
そっと部屋を抜け出しドアを静かに閉めて外に出る。
鍵をかけて近くの朝から開いているスーパーに自転車で向かう。

なんだか久々に1人になった気がした。
朝の清々しさが
この短期間にわたしが体験したことがいかに異常なものだったかを
教えてくれているようだった。

適当な材料を購入し家に急ぐ。
少し不安はあったけど、彼はまだベッドで寝ていたままだった。

朝ごはんは簡単に済ませ
スクランブルエッグにベーコンに食パンと言ったラインナップ。
作ってる最中に彼が目覚まし
少しだけ手伝ってもらい、一緒になって食べた。
もちろん彼は、おいしいおいしいと連呼していた。

昼頃になるまでわたしは終始落ち着かなかった。
いつ話を切り出そうかと迷っていた。
彼は朝のテレビ番組を普通の休みの日のお父さんのように
くつろいで見ている。
彼氏ができたらこんな感じの毎日なのかな…と
1人妄想にふけっている自分もいた。

結局切り出せずに高鳴る胸を残したまま
時計の針は12時を回ってしまった。
昼ごはんを適当に済ませわたしは意を決して話を始めた。

「あの…ちょっといいかな。」

改まったわたしの問いかけに少しビクッとする
彼はわたしの方に体を向け目をしっかりと合わせてきた。
こう言うところに何気ない誠実さを感じてしまう。

「うん、なに？」

「実はね、ちょっとお願いがあって。」

「おう、なんだ？」

ある意味賭けだった。
彼の記憶を取り戻す鍵が、ある1つの感情に依存しているのであれば
今からすることはなんらかの意味を持つと信じたかった。
わたし側にリスクがないとは言えないんだけど…さ。

向き合って少し沈黙になる。
頭の中にこれから行うべき段取りは全て構築されている。
まずは第1段階。

「とりあえず、服脱いでもらっていい？」

「服？ここでか？」

「うん。」

分かった、と言って躊躇いなく服を脱ぎ始める彼。
さすがにそろそろ慣れてきたかな…とか思ったけど
やっぱりいざとなるとドキドキしてしまう自分がいた。
パンツ1枚残して脱ぎ終えた彼。

「全部？」

彼が訊いてくる。

「…うん。お願い…します。」

自分から脱いでと強制して、その光景を目の前で見つめると言うのは想像以上に恥ずかしいものだった。

そんなわたしの感情などお構いなしと言った感じで最後の1枚を脱ぎ去る彼。

ボロロン。

当たり前だけど3日連続で男の人のおちんちんを見るのはこれが初めてだった。

パンツを床に置き股間を突き出すように背筋を伸ばす彼。

「これでいいか？」

「うん、ありがとう…。」

わたしは目をそらしそうになったけどそれじゃ何の意味もないと思い必死にその姿を凝視した。

「今わたしは君のおちんちんを見てる。

分かる？」

「…うん、そりゃ分かるよ。」

「隠したいとか、ドキドキするとかは感じない？」

「…うん、特に。」

何が始まるんだと、かなり不思議がった様子の彼。

ごめんね、でもわたし馬鹿だから、こう言うことくらいしか思いつかなかった…。

これはまだまだ第1段階、こんなことで問題が解決するとは私自身だって思っていなかったから別に落胆したりはしなかった。

「じゃ、じゃあ、わたしに…

お尻の穴、見せてもらえる？」

「し、尻の穴？」

思わぬワードにきっと意表を突かれたような顔をする彼。

…言ってるわたし自身の方が恥ずかしかった自信があるけどね…。

「なんでだ？」

「…逆にわたしの方こそなんで？」

「見せたくないの？恥ずかしいの？」

言葉で攻め続けるわたし。

実は一番の目的はここにあったんだけどね。

「いや…別にいいけどさ。」

彼はそう言ってわたしにお尻を向けた。

恥ずかしがったりとかそう言うんじゃないくて

単純のわたしの要求に疑問を抱いているようだった。

「これでいいか？」

そう言ってわたしにお尻の穴が見えるように

両手で肛門を開き見せ付けてくる彼。

「ごめんね…。」わたしは心の中でそう呟き

彼のお尻の穴を観察した。

自分のも見たことないのに、まさか好きになった人のお尻の穴を見るなんて…

なんだかおへその穴みたいにキュッとなっていて

彼の鼓動に合わせて開いたり閉じたりしていた。

穴の周辺にも、少しだけ毛が生えているのが分かった。

その下にはいわゆる『裏タマ』がゆらゆらと揺れている。

さすがにわたしは直視することができずに俯いた。

でもここまできたらやりきるしかない…よね。

「うわ～わたしお尻の穴なんて初めて見た…。

…汚～い…。」

わたしは一番言っちゃいけないような言葉を投げかける。

「お、お前が見たいって言うから見せたんじゃないか。」

少し狼狽したようにわたしの方に向き直す彼。

彼の顔を見ると顔はいつも通りで赤らんでいたりはせず
ただ文句がありげにわたしの顔を見つめているだけだった。

…これでも駄目か…
もう少しやってみるしかないかな…。

「…って言うか前から言おうと思ってたけどさ。
…その…おちんちん、小さいよね。」
「そ、そうか？」

意外そうに自分のおちんちんをマジマジと確認する彼。
小さいなんて思ったことなんてないよ。
立派なおちんちんだなっていつも思ってたけど
こうすることくらいしかできないんだよね。

「小さいよ、すごいお子ちゃまのおちんちんって感じ。
…しかもその年になってまだ皮被ってるとか…
なんか恥ずかしくないのかなーって思うよ。」

自分の発する一字一句全てが
普段言葉にしないような卑猥な内容だったから
わたしはいちいちドキドキしなければならなかった。
鏡がないから分からないけど、おそらく顔は真っ赤だったんだと思う。

「いや…これは」

そう言って彼は自分のおちんちんの先っぽをつまむと
少しいじってわたしに見せつけてきた。
わたし自身それが初めて見るものだったから、動揺は隠し切れなかった。
ペロンと先っぽの皮が剥けて
ピンク色の中身がひょっこり顔を出していた。
おちんちんってこうなってるんだ…とただただ興味津々に
それを頭に焼き付ける…と言うか焼きついてしまう。

「…な？」

包茎じゃないだろ？と言わんばかりの彼。

「女の子の前でおちんちんの皮剥くなんて…
サイテー。」

そう言って彼を突き放す。

「す、すまん。」

彼は一言そう言うとおちんちんの皮を元に戻した。

思いのほか威勢がなくなって

しゅん…と全体的に体が少しちっちゃくなってしまったように見えた。

やっぱり少なからず、ショックだったのかな…？

ショックと恥ずかしいって言う感情はある意味紙一重だと思うけど

それを感じることができたところで、解決に繋がるとは思えなかった。

いきなり悪いやつになったとか思われちゃったかな？

わたしのこと嫌いになっちゃったりしないかな？

彼に好意を持ってしまっているだけに

こんなことであれば絶対にしたくなかったけど

彼の記憶を取り戻し、わたしを見てもらうためには

これしか方法がないような感覚にとらわれていた。

これでもし駄目なら、わたしが一肌脱ぐしかない。

やっぱりそのことには抵抗があったから

出来ればその前に目覚めて欲しいと言う願いもこめて

わたしは彼のおちんちんを彼が不思議がるくらいに

ジーーーーーっと見つめた。

「見…過ぎじゃないか？」

「…いやなら別に隠せばいいじゃん。」

「いや別にそう言う意味じゃなくて…なんかおかしいか？」

「別に…ただ見てるだけ…。」

「…そか。」

これ以上この鑑賞会を続けるのは無意味かな、と思った。
彼はわたしの言動に完全に不信感を抱いているけど
羞恥の感情は抱いているように思えない。
普段通りの血色のいい、赤らむ様子のない彼の顔からもそれは窺える。
でもそれ以上に、男の人はドキドキしたり興奮したりすると
体の大事な部分が大きく変化するってことを知っていたので
彼にその変化が見られない以上、恥ずかしがっているとは到底思えなかった。
…つまりは彼のおちんちんに何かしらの変化があって初めて
わたしは彼の中でも何かしらの感情の起伏があったと判断できる。
だから、恥ずかしながらすっぽんぽんになってもらったんだけど…さ。
男の人のそんな姿って、当たり前だけど見たことがない。
たぶん今のところは何も変化がないと言えるはず。
ペロン、と先っぽの皮が剥けたのはびっくりしたけど
あれについても本か何かで見たことがあったから
普通なら卒倒する場面だったけど、なんとか意識を失わずにいられた。

彼は依然として素っ裸のまま立っている。
普通の感情を持っていたら、こんなの絶対嫌だよね。
好きでもない女の前で大事な部分見せろって言われて
自分は何のことだか分からないからただそれに従うしかない。
そんな風に思うと、もの凄く申し訳なくて可愛そうになり
何より自己嫌悪に陥ってしまいそうになる。
不安そうな瞳をジッとわたしの方に向けている彼。
そんな彼を見て、早く終わらせてあげなきゃ…と
自分がすべき行為をすることへの決心がついた。

わたしはその場に立ち上がる。
彼の視線を感じながら、その場で大きく深呼吸をして息を整えた。
何をするのか彼に告げてからしようとも思ったけど
そんなことしたらこっちが逆に意識してしまいそうだったので
わたしはそれを無言で開始することにした。

上に着ていたセーターを脱ぐ。

躊躇っていても仕方がないから続けざまに中のインナーも脱いだ。

彼はそんなわたしをじっと見つめている。

きっと今わたしのブラジャーを凝視しているんだろう。

やっぱり…恥ずかしいな。

1人の女として、好きな人に自分の裸をさらすと言うのは
やっぱり相当の勇気がいるものなんだと実感した。

さらにわたしは下に履いているデニムにも手をかけ…
スルリと足から脱ぎ去ると、上下下着姿になった。

さすがにびっくりしたような顔をする彼。

滅多に見れるものじゃないはずだもんね、異性の下着姿なんて。
そんなことお構いなしと言った表情で彼は

「風呂でも入るのか？」

なんて言ってくる。

体中の血が脳に回って、顔から火が出そうになる感覚に陥る。

と同時にいくら記憶を失っているとはいえ

その無神経な発言に、さすがのわたしも少しイラッとしてしまった。

こんな恥ずかしいことしても彼は分かってくれない…

そう思うと少し焦燥感みたいなものも芽生えてしまった。

「ち、違うよ…。

とりあえずそこで見てて！」

わたしはここまできたらやりきるしかないと自分に言い聞かせ
ブラに手をかけた。

わたし胸には自信ないんだ…

ふと昨日彼に「胸ちっちゃいな。」と言われたことが頭をよぎり

フックを外す手を躊躇ってしまったけど

もう後戻りなんて出来るわけない。

一気にそれを取り去る。

わたしのおっぱいが彼の前であらわになった。

わたしは恥ずかしくて彼の顔を見ることが出来ず
彼のおちんちんまで視線を上げるのが精一杯だった。
…そのおちんちんはさっき見たままの状態
男の人が興奮したときに見せるその形状とは、似て非なるものだった。

やっぱり駄目なのかな…
わたしは半ば諦めモードのまま
もうどうにでもなれと若干やけになりながら
最後の1枚もスリを脱いで見せた。

ついに素っ裸になってしまったわたし。
当たり前だけど男の人の前で裸になることなんて初めて。
それができたのはきっと彼の前だったからなんだろうけど
だからといって恥ずかしさが半減されるのかと言ったらそんなわけもなく
死ぬほど恥ずかしいけど必死でそれを我慢して、彼の反応を待った。

10 秒間くらい沈黙が続いた。
わたしはとにかく恥ずかしさで頭が沸騰しそうだった。
…いくら待っても彼の反応が来ないので
いても立ってもいられなくなり
わたしは意を決して視線を上げる。
最初に目に入るおちんちんは、正常位のままであるのが分かった。
更に顔を上げて視界に入る彼の顔は
明らかに今まで見たことのないものであるのは確かだった。

ドキドキしていたり恥ずかしさみたいなものは伝わってきたのではない。
ただわたしの姿を上から下まで何度も撫でるように見つめ
目を見開いて本当にびっくりした顔をしていた。

「…あ、あの…。」

自分で脱いどいてなんだけど、どうしていいか分からず
小さく声を漏らすわたし。泣きそうだった。

「あ、いやその…。
初めて見たものだったから…その…」

ちょっとびっくりして…」

頬を人差し指で掻きながら
わたしの体を見たことを告げ、立ち尽くす彼。
そのことが一層恥ずかしさを加速させた。
その一方でこの恥ずかしさが彼に伝わっていないという事実が
悲しいくらい悔しかった。

「…ドキドキしたり、興奮したりしない？」

わたしは彼の顔を見てそう言う。
きっと声は震えていた。
目頭が焼けるように熱くなっていて、すぐにでも涙がこぼれ落ちそうだった。

「ドキドキ…する…かな。
良く分からないけど
胸の奥がもの凄く…なんか…そわそわするぞ。」

この感情はなんなんだろうと言った風に
目を泳がせて考え込んでいる様子の彼。
明らかに今までと違う反応にわたしは驚いていた。
もしかしたらもうそこまで来ているのかもしれない。
…躊躇ってなんていられない、やれることはやっておこう。

「その…触りたかったら…さ。
触ってもいいよ。」

これで駄目ならもう諦めるしかないと思った。
本当に最後の賭けだった。

「いい…のか？」

彼がびっくりした子犬みたいな目をわたしに向けてくる。
「…うん。」と、か細い声でわたしはその問いに答えた。
わたしの返事を耳に入れると
彼はゆっくりとわたしの方へ歩み寄ってきた。

わたしの目の前で静止する彼。

こんなに近くでおちんちんを見たのはこれが初めてかもしれない。

ふさふさに生えたおちんちんの毛とギャランドゥを下から上になぞって見ていき
改めてわたしが今置かれている状況の凄さを実感した。

「どこ触ってもいいのか？」

何も考えていないのか、興味津々なのか

今のわたしでは心理を汲み取ることができないような表情をしながら
彼はそう訊いてきた。

「…う、うん。

いいよ。」

全てを承諾するわたし。

「そうか、じゃあ…」

そう言っていきなり両手でわたしの胸を

鷲づかみにしてくる彼。

予想はしていたけど突然のことにわたしは意識を失いかけた。

10本の指で彼はわたしの小さな胸をゆっくりと揉んでくる。

その感覚が今までに味わったことがないくらいなんだか気持ちが良いくて
わたしは下半身が昨日と同様の感覚に襲われていることを実感していた。
彼の目を見ると真剣そのものと言った感じだった。

わたしの倒れてしまいそうな恥ずかしさをよそに

彼はその手を下へと移動させる。

お腹、わき腹、順々に感触を確かめるように触っていく彼。

その手はついにわたしの下半身へを辿り着いた。

彼が右手をわたしの股にそっと被せた。

左手でわたしのお尻を触っている。

本当にすぐ近くに映る彼の顔は驚きと発見に満ちているように見えた。

彼のかすかな鼻息がわたしのおでこあたりにかかるのを感じ

火照りきったわたしの体を、更に刺激させた。

「…すげえ、濡れてるぞ。」

彼の第一声はそれだった。

彼は自分の手についたそれを見た後、わたしの顔を見てそうやってきた。

「…ご、ごめん…なさい。」

わたしはそれしか言う言葉が見つからなかった。

彼はわたしのその言葉を聴くと

両手をわたしの体から離し、1歩後ずさりをした。

…え？終わり？

わたしはきっと紅潮しきった顔を彼に向ける。

「え…その…なんか…

ドキドキしたり…しなかった？」

「…うーん、分からない…

でも…初めて味わう感覚だった。」

濡れた右手をジーっと見つめ、不思議そうに首を傾げる彼。

こんなことまでしても駄目なの…？

ここまでしても駄目なんて、もうわたしにできることなんて何もないよ。

いろんな感情が入り混じって

悔しくて、悲しくて、情けなくて…

自然と我慢し続けた涙が、一気に溢れ出していた。

そんな姿を見て彼はどうしていいか分からなそうに

あたふたと目を泳がせ始めていた。

もうこんな気持ち嫌だ…お願い、分かって…。

そう思うと

わたしの体は無意識のうちに彼の体に抱きついてた。

両手を背中に回し彼にギュッと抱きつく。

体全体から彼の体温が流れ込んでくる。

わたしは彼の胸に顔をうずくめ、泣きじゃくりながら叫んだ。

「…お願い！お願いだから思い出して！
わたしの気持ちに気づいて！お願い…」

この年にもなって、わたしは本気で神頼みした。
こんな気持ちもうやだ、1人ぼっちはもうやだ…
わたしに…気づいて…。

最後の勇気を振り絞り
わたしは右手を、自分のお腹辺りにくっついていて彼のおちんちんに近づけ
それを優しく握った。
お願い…大きくなって…！大きくなってよ…。
わたしの溢れ出る涙は彼のお腹を伝ってこぼれ落ちていき
彼のおちんちんを握り締めたわたしの右手に流れ着いていた。

彼の両手がわたしの腰周りに回されるのが分かった。
一瞬ドキッとしたけど
それは彼の優しさから来る慰めの意味での行為であることと
わたしの頭はすぐに理解してしまった。

結局わたしの気持ちは伝わらない…
こんなに恥ずかしいのに、こんなに彼で溢れているのに
わたしの心は彼には響かない…。
そんな虚無感と焦燥感に襲われ半ば諦めかけていた…
次の瞬間。

ドクン。

大きな心臓の高鳴りがわたしの体に伝わってきた。
それはわたしの体から発せられているものではないことを
すぐに悟った。
そしてそれが、わたしがうずくめている彼の胸から来ているものであることに気づくのに

それほどの時間を必要としなかった。

最初の1回の大きな跳ね上がりのあと
その鼓動は小刻みに、かつ徐々にスピードを増していく。

…え？……え？？

わたしの上がりきった鼓動も更に速度を上げ
身動きがとれずにそのままの状態で立ち尽くしていると
右手に明らかに不思議な感覚が伝わってくるのを感じた。
彼の心臓の鼓動よりも少し遅いスピードで
脈動を開始するそれ…つまりはおちんちん。
ビクン、ビクンとわたしの右手の中で動く彼のおちんちんは
30秒も経たないうちに、わたしの手の中では収まりきらないほど
大きくなっていった。

こうなることは知っていたけど実際に見るのは初めてだったから
食い入りようにそれを見つめてしまうわたし。
30秒前のそれとは似て非なるもので、大きさは数倍にも膨れ上がっていた。
先っぽには完全にピンク色の部分が飛び出している。

完全に大きくなりピーンと上を向いたそれを10秒ほど見つめると
わたしは急にそれを握り締めている自分が無性に恥ずかしくなり
それを離した。
と同時に彼がどうなったのかを出来るだけ早く確認したくて
腰に回された腕を解いて1歩体を引き
彼の顔を凝視した。

わたしはたくさん入り乱れる感情の中で
びっくりという感情を、一番最初に脳に送っていた。

彼は
真っ赤に染めた顔を
わたしの顔に向けて立っていた。

素っ裸のまま少しだけ距離をとって
見つめ合うわたしたち。

身動き1つせず丸出しのまま向かい合う静寂の中で
彼のおちんちんだけがビクンビクンと大きく脈動を打っていたので
どうしても視線はそちらに行ってしまった。

「…あ、ご、ごめん！」

わたしの視線に気づいたのかそう言葉を走らせると
両手で必死でそれを隠そうとする彼。
でもそれは彼の両手でも隠しきれないほど大きくなってしまっていて
いくら手を加えてみても、わたしの視界から消えることはなかった。
そんな慌てる彼の顔に、そっと目を向ける。
今まで見たこともないくらいに顔を赤らめていて
その姿からは彼の『恥ずかしい』という感情くらいしか
読み取ることが出来なかった。

成功…なのかな？
わたしは何も身につけていないことなど忘れて
1人変な感傷にふけていた。

ほとんどはみ出してしまっているけど
隠れたと言うていで彼はとりあえず両手の動きを止めた。

「お、お前も、早く隠せよ…！
こっちまで恥ずかしくなっちまうだろ…。」

彼はわたしの方に目を向けそう言うと
すぐさま目をそらして俯いた。

彼からそんな言葉が出てきたことにまず驚いたけど
彼が感情を取り戻したということは、まず間違いなさそうだった。
…と同時にわたし自身が素っ裸でいることの重大性に改めて気づき

わたしは急いで両手で胸と下を隠した。

下半身は昨日のときなんか比にならないほど、ぐちょぐちょに濡れている。

顔から火が出てもおかしくないほどに、恥ずかしさが体中を覆っていた。

改めて向き合うわたしたち。

「…ど、どうしよう。」

震える声で無意識に呟くわたし。

「どうしようって言われても…。」

彼は困ったような顔をして真っ赤に染めた顔を

わたしに向けてまたすぐにそらす。

少しおちんちんを隠す手を緩めてしまったのか

その隙を見逃さなかったおちんちんが彼の手の指をすり抜けて

びーーん…と高らかに跳ね出た。

「きゃ！」

思わず声を上げて顔をそらすわたし。

「う、す、すまん！」

慌てて再び隠す彼。

良く見ると彼の頭からは汗が噴出していた。

そしてふと彼の眉毛がピクッと動いたかと思うと

あからさまに、マズイ！と言った表情を浮かべて

一言「すまん！」と小さくわたしに言うと

わたしの横を小走りで抜けていき

トイレの中に急いで駆け込むと、思いきりドアをボタンを閉めた。

突然起こった彼の変化に動揺しながらも

横を見ると鏡に映る素っ裸の自分の姿を目の当たりにし

意識を失いそうになるくらい恥ずかしくなって

わたしは急いで脱いだ服を着た。

1回シャワーを浴びたいほど汗だくになっていたけど
今はそんな欲求を満たしている場合ではなかった。

彼の無造作に脱ぎ捨てられた服を素早くたたみ
机の横にそっと置く。
わたしはベッドに背もたれるように座り
枕を抱きしめ、出来るだけ何も考えないように彼が出てくるのを待った。

5分くらい待ったときかな。
トイレットペーパーの紙を巻き取るカラカラという音と
トイレの水が流される音が聞こえた。
…用を足していたの？この状況の中で？
そんな疑問が頭をよぎったけど、それ以上に気になることなんて五万とあった。

少ししてトイレのドアが開く。
ドキドキしながらそちらに目を向ける。
中からもちろん素っ裸の彼が出てきた。
…おちんちは両手でしっかりと隠されていた。
もう正常な形に戻ったみたい。
…などと冷静に状況を把握できてしまっている自分に
少し違和感を覚えた。

彼はゆっくりと部屋の中に入ってくる。
問題の彼の顔は、やっぱりまっかっかのままだった。
体中が汗で光っているのが分かる。
わたしはただその顔をジーーーーーっと見つめる。
今までに見たことのなかった彼の表情に
単純にドキドキしているのかもしれない。

「あ、あっと…」

困ったように部屋を見回す彼。

「…あ。こ、これ？」

そう言ってわたしは折りたたんでおいた彼の服を差し出す。

「あ、す、すまん…。」

さっきのあの瞬間から謝ってばかりだな…なんて思った。

わたしが両手で差し出したその衣類を彼は片手で受け取ろうとする。

もちろんもう片方の手はおちんちんを隠したまま…ね。

彼が受け取ったことを確認してわたしは手を離す。

でも完全にまだつかんでいなかったみたいで

洋服は支持力を失い床に落ちそうになる。

それを落とすまいと彼は「おう！」と声を漏らすと

もう片方の手でその洋服をキャッチした。

ぷるるるんっ。

当然のごとく再びあらわになるおちんちん。

さっき見た極大のおちんちんではなく

かといってずっと見てきた普通状態のおちんちんでもなくて

その中間くらいの大きさに位置するであろう半勃起状態のおちんちんだった。

もちろん初めて見る彼の３種類目のおちんちんに

わたしは釘付けになる。

「ああ…！も、もう、すまん…。」

そう言って素早く洋服でおちんちんを隠す。

彼の顔に視線も向けると

もうどうしようもないくらい恥ずかしいといった表情で

顔を真っ赤にして俯いていた。

「き、着替えてくる！」

そう言うとはおちんちんを隠したまま再びトイレへと駆けていった。

今度はプリンと彼の可愛いお尻があらわになる。

それすらも恥ずかしいのか彼は左手で申し訳程度にお尻を隠しながら

トイレへと消えていった。

少し唾然としてしまうわたし。

あんなに裸を見せることに全く抵抗を見せていなかった彼が
今は驚くほどその行為を恥ずかしがっている。

その光景が妙におかしくて、わたしはいけないと思いながらも
我慢できなくなり、クスクスと笑ってしまった。

心臓のドキドキもさきほどのときと比べると

少し落ち着いてきているのが分かる。

わたしの恥ずかしさを彼が吸収してしまったのかも…とか
非現実的な発想が出来るほど

割を普通の状態まで回復していた。

…とは言っても体はまだ熱を帯びていて

鏡を見るとまだまだ顔が赤いのが分かる。

当然だけど…ね。

先ほどと同じ体勢で彼が出てくるのを待つ。

ガチャッとドアが開くと着替え終わった彼がそこには立っていた。

頭を掻きながら真っ赤な顔をこちらに向けて

立ち尽くしている。

「…と、とりあえず座ったら？」

いざ目が合うとドキドキしてしまって

その声が震えてしまっているのが自分自身でも分かった。

「お、おう。」

そう言ってわたしの隣に少し間を取って座る彼。

完全についさっきまでの彼とは感じが異なっていた。

その事実が少しわたしを寂しくもさせたけど

わたしが好きになったあの感じが

彼の潜在的な優しさからくるものであったんだと

心の中で信じている自分がいたし、その自信もあったから

それほどショックを受けたりはしなかった。

沈黙が部屋を無情に走る。

いざとなるとどうやって話を切り出していいのか分からなくて

わたしは完全にフリーズしてしまった。

心拍数もそれに伴ってぶり返していくのが分かった。

彼は今どんな顔をしているんだろう。

見たいけど、恥ずかしくて見る事が出来ない。

…何か思い出した？

その言葉から始めてみようと思い

わたしが彼の方を向いて口を開きかけた瞬間。

「…ちょ、ちょっと散歩してきてもいいかな？」

わたしが言う前に彼が口を開いた。

「…さ、散歩？」

彼の顔に焦点を合わせ意外と言った表情を浮かべてみるわたし。

…実際意外な発言だったわけだけどさ。

「ちょっと気分転換したくて…さ。

…すまん。」

そう言って立ち上がり

ゆっくりと玄関に歩を進める彼。

「え、ちょ、ちょっと待って！」

さすがに驚いて彼を引きとめようと立ち上がる。

わたしが玄関の前に着く頃には

彼は裸足のままで靴置き場に出てきた。

そのまま無言でドアの取っ手を握り、それを押し開ける彼。

「え、ちょっと…す、すぐ帰ってくるよね！？」

焦る気持ちを彼にぶつける気持ちで
精一杯の声を張り上げて彼に声をかける。
靴なくて大丈夫なの？という疑問も当然のごとくあったけど
それよりもとにかく、その質問の応えが欲しかった。
少し沈黙があってから彼は

「…お、おう。」

と一言言うと彼はドアの姿へと消えていった。

…バタン。
大きな音を立てて閉まったであろうその音は
わたしの耳にはほとんど届かなかった。

何もすることが出来ず1分ほど時間が過ぎたのかな。
いろんな感情が交錯して自分は今何をすべきなのか
分からなくなってしまったけど
考えても分からないなら、感性のままに動くしかない
気づくとわたしは無意識のうちに家を飛び出していた。

玄関の外には彼の姿はなかった。
昨日の夜、彼を探したときみたいに
わたしは彼が行きそうな場所を手当たり次第に走り回った。
あの公園にも行った。
でもどこを探しても彼の姿を確認することは出来なかった。
焦りと不安で公園の真ん中で立ち尽くすわたし。
ようやくそこで自分が裸足のまま飛び出してきたことに気づいた。
同時に感情的になって彼を追いかけてしようとした自分を少し恥じた。

家に帰ってシャワーを浴びる。
きっとあの様子からすると

失くしていた記憶を全て思い出したんだよね。
だとしたらわたしのしたことってきっと大成功…のはず。
でも思い出したことで彼が変わってしまうかもしれないと言う恐怖は
未だに捨てきれずにいた。
事実恥ずかしさを取り戻した後の彼は
わたしの知っている彼とは別人に近い印象を受けた。
…でも、帰ってくるよね？と言うわたしの問いに
彼はおうと応えてくれた。
いろいろ気になることはたくさんあるけど
今はそれを信じて待つしかないなと思った。

時計の針はまだ3時頃を指している。
とりあえず彼が帰ってくるまで時間を潰そう…。
…って言うかそういえば明日から学校じゃん。
この土日彼のことで頭いっぱい他に何もできなかったけど
宿題も何もやってないし、諸星君のことだってあるし
急に現実に戻されると
それなりにマズい状況にあることに気づいた。

彼のことは気になるけど
やるべきことは済ませておかないと…。
やる気なんて早々起きるものじゃないけど、いい気晴らしにはなるよ、うん。
そう思いわたしはスクールバックから宿題を取り出し
英語の宿題を始めた。

黙々と宿題をするもやっぱり彼のことが気になって仕方ない。
悶々とした気持ちを抱いたまま
わたしはなんとか明日の分の宿題を終えるまでこぎつけることが出来た。

時計の針は午後6時を回っていた。
彼が部屋を出て行ってからもう3時間あまりが経とうとしている。
すぐ帰ってくる、と言ったわたしの質問に対する応えが
肯定の返事だったのだから
その応えは嘘だったことになる。
その事実がわたしをもの凄く焦らせてけど
わたしにはどうすることもできない。

彼と連絡を取る手段が何もない今
ただ彼の帰りをじっと待つことしかできない。
気晴らしに買い物にでも行こうかと思ったけど
その間に彼が帰ってきたら大変だと言う考えが先走り
家に待機することを余儀なくされた。

1人でキッチンに立ち料理を作る。
こうしていつもの日常に急に戻されると
金曜の夜からの出来事が全て幻だったかのように思える。
ふと思い出したようにベランダに出る。
まだ干したままにしてあった洗濯物を見ると
そこには確実にわたしが彼のために買ってあげた洋服3点が干してあり
あれは嘘じゃなかったんだとわたしを励ましてくれた。

夕食を食べ終わりやることもないのでテレビをつけた。
日曜日のゴールデンタイムなんて面白い番組だらけのはずなのに
今のわたしには何1つとして頭に入ってこなかった。

何処に行っちゃったんだろう…。
もう会えないのかもしれない…。
そんなことを考えると途方に暮れたように寂しくなって
自然とまた涙が溢れていた。
わたしってこんなによく泣く人だったっけ…？

…そんなことを考えているうちに
わたしはウトウトと
夢の中へ落ちていった。

朝目が覚めると、テレビがついていた。
…そっか、そのまま寝ちゃったのか…。
時計を見ると朝の7時を回っていた。

彼の姿はもちろんない。
わたしが寝ている間に帰ってきたのかもしれないとも思ったけど
そんな形跡何処にも残っていなかった。
都合のいい可能性にすがりつくのはやめよう…。

シャワーを浴びて適当に朝食を取り、家を飛び出す。
学校に行っている間に彼が帰ってきたら…と思い
家の鍵を空けておこうかと思ったけど
そんな危ないことするのはやめろ、と
頭の中の理性的なわたしがそれを抑制してくれた。

学校への通学路はもの凄く気持ちが沈んでいた。
清々しさなどというものは欠片も感じるができない。
毎日のように沈んだ気持ちで登校していたけど
あのデパートのことが頭をよぎり、その気持ちを一層強いものにさせた。
更に彼のことが幾度となく頭の中を駆け巡り
わたしの精神状態はボロボロと言っていいものになっていた。

学校に着き大きなため息と共に校門をくぐる。
自転車置き場にわたしのそれを置き
重い足を引きずりながら教室のドアを開け中に入る。

入ってすぐ、わたしは異常な雰囲気を感じ取った。
…クラスのみんなからの視線を一斉に浴びているような気がした。
事実何人ものクラスメイトが
わたしを噂するような目で見つめていた。

嫌な予感が頭をよぎった。
…と言うかきっとその予感の的中しているに違いなかった。

出来るだけ誰とも目を合わさないように
わたしは自分の席に座る。

ざわざわと騒々しい空気を醸し出す教室。
こんなにざわついているのに
誰の声もわたしの耳に鮮明に届かないのが不安で仕方なかった。
こんなことなら…と耳をふさごうとした瞬間。
わたしの目の前にクラスの女子のリーダー的存在である楠木さんが
机を挟んでわたしの目の前に立ちはだかった。
心臓が大きく跳ね上がる。
ここ何日も幾度となく心拍数を制御できなくなる局面に立ち会ってきたが
このドキドキは絶望的なものであると確信できた。

「あんた…金曜日の夜何してたの？」

冷徹なその目からは光を感じ取ることは全くできなくて
明らかによそ者を見るような、非難の黒に満ちていた。

「え…別に…な…にも」
「諸星君がさ、あんたがデパートで男ものの服一式を買っていくの
見たんだって。」

震える声を振り絞るわたしの言葉を最後まで聞く前に
知られるのを恐れていた事実を楠木さんはサラッと言った。
やっぱりバラしたんだ諸星君…
一瞬彼に憎悪の感情が生まれたけど
彼に非があったとするのはおかと違いのような気がして
すぐにその感情を殺した。

「あ、あれは…」

いい理由が思いつかずただただ狼狽してしまうわたし。
こんなおどおどしてたら逆に怪しまれちゃう。
しっかりしなきゃ…と思うけど
どうしてもどうしていいか分からなくてドキドキして
泣きそうになってしまう。

「あんた確か1人暮らししてるんだよね？
おかしいよね、男の人の服買っていくなんて。」
「だから、そ、それは…」
「どうせまたどっかの男引っ掛けて、家で同棲でもしてるんでしょ。
ちょっと前に聡美の彼氏奪おうとしてたくせに。
懲りもせずに早くも次の男探しですかー。
いいねえモテる女は。羨ましいったらありゃしない。」

わたしが反論する隙を全く与えないほど
汚いようなものを見る目をわたしに向け
強引に言いたいことをそう吐き捨てると
楠木さんは女の子グループの固まっている方へ歩いていった。

一高校2年生の5月。
今から約半年前。
そのときはまだわたしはクラスのみんなとも仲が良くて
毎日楽しい高校生活を送っていた。
楠木さんとも仲が良くて、わたしは彼女のグループの一員でもあった。

ある日の放課後。
わたしはいつものようにバドミントン部の練習に向かおうとしていた。
するとバドミントンの用具倉庫室の前で
サッカー部で同じ学年の小林君が、誰かを待っているように立っていた。

「あれ？どうしたの？」

わたしが訊くと小林君は

「ん…いや…その。
お前が来るのを待ってた。」

いきなりの応えにさすがのわたしもドキッとした。
わたしはその週の用具当番だったから
誰よりも早く倉庫に出向いて準備をしなければいけなかったから
他にはまだ誰も来ていなかった。
きっと小林君はそのことを誰かから聞いて
こうしてわたしを待っていたんだと思う。

「…そ、そうなんだ。何か…用？」

真剣なまなざしを向けてくる小林君に少し警戒しながら
わたしは問いかける。

「俺と…付き合ってくれないか？」

いきなりの告白に最初は何のことだか分からなかった。
それを頭の中で素早く整理し、次の瞬間頭に浮かんだのは
何言ってんのこの人？という非難の感情だった。

「な、何言ってんの？おかしいなあもう…。
小林君には聡美がいるじゃない…」

小林君と聡美は付き合っていた。
それは多分学校中でも有名だし
美男美女秀才同士のナイスカップルと言うことで
学校中から羨ましがられている2人だった。
当のわたしもそんな2人を凄いお似合いだと思っていたし
聡美とも仲が良かったら
2人が付き合うことになったときも自分の事のように喜んでいた。

「…でも俺。
お前のことが好きになっちゃったんだ…。」
「…そんなこと言われても…
お、おかしいよそんなの。」

びっくりしていたけどわたしを好きになってくれたことには
素直に感謝しなきゃいけないような気もして

否定ばかりはしてられないとも思った。

でもわたしには小林君に対する恋愛感情みたいなものはまるでなかったし
なにより聡美の彼氏からそんなこと言われるなんて思っていなかったから
どう対応していいのか、わたしには見当もつかなかった。

「でも…好きになっちゃったから…さ。」

「…聡美にはそのこと言ったの？」

「…い、言えるわけじゃないか…そんなの。」

「じゃあこれは、おかしいよね…？」

「でも…俺本当にお前のこと好きだし…。」

わたしの心の葛藤とは裏腹に

ただ自分の気持ちだけバンバンとぶつけてくる彼。

頭もいいスポーツも出来て確かに格好いいけど

恋愛に関しては全く女の子と気持ちが分からない子供なのかな
と思った。

と同時に、聡美のことはどう思っているんだろう…

自分が好きになったものは何が何でも手に入れたいだけじゃないのかな…

好きなものが出来たら他のものなんてどうでもいい。

そんな考えを持っている、とてつもなく残酷な感情を持った人にも見えてしまった。

…聡美が可愛そうで仕方なかった。

「…とにかくその…好きって気持ちは嬉しいけど

わたしは小林君のこと、そう言う目で見れないから…ごめんなさい。」

非難の言葉をぶつけようかとも思ったけど、そこは我慢して

わたしは出来るだけ穏便になるようにその告白を断った。

「そんな…」

もの凄く悲しそうな絶望的な顔をする彼。

わたしがもう一言「ごめんね…」と言い、彼に背中を向けて歩き出した次の瞬間。

彼がわたしの背中に抱きついてきた。

何？なんなのこの人！？

単純に恐怖で体が固まった。

「俺、本当に好きなんだよ…
こんなに人を好きになったのは初めてなんだ！
だから…お願いだ、俺と付き合ってくれ！」

わたしの耳元でそう叫ぶ彼の力は、抱き締めるには強過ぎて
わたしは叫ぼうか迷うほどに怖くなっていた。

「そんな…こと言ったって…
駄目なものは駄目なの…！！
聡美にもまだ…言ってないでしょ…？
そんなの、おかしいでしょ？分かるでしょ…！？」
「で、でも！」

彼はわたしを放そうとしない。
そんな彼を見て、ふと思った。
この人は今まで何の不自由もない生活を送ってきたんだろう。
欲しいものがあればすぐに手に入れることが出来る環境の中で
両親に過保護に愛され、生きてきたのだろう。
だから自分が欲しいと思ったものが手に入らない状況下に置かれたとき
どうしてもそれが許せなくて
なんとしてでもそれを手に入れようとしたくなるんだろう…と。
自分が今まで感じてきた悲しみや寂しさ、報われなさを
そんな行動と照らし合わせてみて
なんて自分勝手な人なんだろうと、心の底から軽蔑した。
こんな人と付き合っていたら危ないよ…
わたしは早くこのことを聡美に知らせてあげなきゃと思い
精一杯の力で彼の腕を振りほどこうとした…
次の瞬間。

急に彼の力がわたしの体から消えた。
その隙にわたしはスルリと体を動かし、彼から2、3歩遠ざかる。
どうしたんだろうと彼の顔を見ると
彼もまたわたしではない誰かを見ているようだった。
不思議に思いそちらの方向に視線を向けると…

頭が真っ白になった。

そこには聡美が驚愕の顔をして、立ち尽くしていた。

「…ど、どういうこと？」

鳴きそうな声で訊いてくる聡美。

誤解を解くのと同時に早くこの異常な人の素性を話し
危険だってことを伝えてあげなきゃって思った。

「聡美！いいところにきたあのね…」

「こいつが無理やり俺に迫ってきたんだ。」

…は？

わたしは隣にいる小林君の顔をびっくりして覗き込む。

何を言ってんのこの人は…？

頭おかしいんじゃないの…！？

「…そんな風には見えなかったけど…。」

聡美の瞳からは涙がしたたり落ちていた。

「そうなの、あのね聡美聞いて…」

「いや本当なんだ！信じてくれ！

俺がここを通りかかったら急にこいつに引き止められて
…その、付き合ってくれってせがまれて…。

俺は必死で断ったんだけど…

俺が好きなのは聡美だから！って何度も言ったんだけど…

こいつがなかなか聞いてくれなくて…。

泣き始めて、じゃあせめて後ろから抱いてとか
わけわかんないこと言い出して…さ。

俺としてもそんなことするのはもちろん嫌だったけど

この場を大袈裟にしたくなかったから、つい…

こいつの要求に応えちまってただけなんだ…

信じてくれ！」

わたしは言葉を失った。

なんなんだこの人は…次から次へとポンポンと嘘を言って…
その彼の、心から訴えるような横顔を見て
これが全て演技なんだと頭の中で解釈すると
背筋がぞっとして、吐き気がした。

「違うよ聡美！こんなの全部デタラメだよ！本当はね…」
「聡美！信じてくれ！」

わたしに有無を言わせないと言った感じでわたしの訴えに割り込み
聡美に近づいていく彼。
何をするのかと思ったらその場で、わたしの前で聡美を抱き締め
「辛い思いさせてごめん…」と聡美の耳元で囁いていた。
当の聡美はそんな彼に体を預けて
彼の胸でワンワン泣きじゃくっていた。

…ちょっと待ってよ。
これじゃわたしただの悪者みたいになってんじゃん…。

「行こう。」

そう一言言うと聡美の肩に手を当て立ち去ろうとする小林君。

「ちょっと待って！聡美！」

わたしが聡美に向かって叫び、2人に近寄っていくと
聡美の方からわたしに顔を向けてきた。

「聡美…あのね…」
「信じてたのに…最低。」

聡美から発せられた言葉と、見たこともないような軽蔑をあらわにした目に
わたしは凍りついたように固まった。
それ以上近づくことが出来なかった。
2人はわたしの元から音もなく遠ざかっていく。

意味が分からなかった。

なんでこんな目に遭わなきゃいけないのか分からなかった。
あの人がわたしに告白してきたんじゃない…。
あれは全部嘘だったってこと…？
そんな風には見えなかった…
だとしたら答えは1つ。
わたしに告白して抱きついてるところを見られてしまった。
そんなことが聡美にバレ、学校中にバレたら
今まで自分が築き上げてきた美男秀才スポーツ万能と言う肩書に
少なからず泥を塗ってしまうことになる。
わたしを手に入れたいと言う気持ちも抑えられなかったけど
それ以上に完璧な自分の欠点を人に知られてしまうことを
心の底から恐れたんだろう。
そして結果として、あんな許されがたい嘘を言い放った…。

小林君と言う男の子が憎くて許せなくて哀れに思えた。
でもそれ以上にこの誤解をなんとしてでも解かなければ…と言う
焦りが生まれた。
もしかしたらこれはもの凄くまずいことになるかもしれない…。

そんなわたしの嫌な予感は見事に的中した。
次の日学校に行くと
昨日の噂はもう学校中に伝わっているようだった。
教室に入ったときの感じで、もうおかしいなと言うのが分かった。
みんながみんなわたしを見ている。
それなのに仲の良かった友達たちに話しかけようとすると
まるでわたしのことを無視するかのようにあしらわれる。

違うの…全部誤解なの…！
何度も何度も誤解を解こうと説得したけど
誰1人としてわたしの意見を聞いてくれる人はいなかった。

「小林君がそんなことするわけじゃないじゃん。」

それがみんな全員一致の意見のようだった。

あの日から半年。
学校中からのけ者扱いされ
わたしはわけも分からず1人ぼっちの高校生活を送っていた。
噂でしか聞いていないけど
聡美と小林君は、まだ付き合っているらしい。
はっきり言ってわたしにはそんなことどうでも良かったけど…ね。
誰が悪いのか…と言われてたら完全に小林君だけど
わたしの訴えに一度たりとも耳を傾けてくれなかった
クラスメイトたちにも、わたしはある意味幻滅していた。
もう1人ぼっちで生きていこう。
あの日からわたしは、人間と言うものを信じられなくなった。

ーそして今日。
あの日と同じような感覚を味わっている。
わたしの家に男の人が住んでいて
その人のために服を買いに言ったっていうのは紛れもなく本当の話。
男を引っ掛けて同棲を始めたなんていうのは
あるはずもない嘘事実だけど
過去にああいうことがあったと誤解してるみんながその話を聞けば
そう勘違いしてもおかしくないな、と頭の中で解釈していた。

わたしは耳を塞ぎたかった。何も見たくなかった。
この場にいるのが凄い辛かった。
周りのみんなの冷たい視線を感じる。
過去に味わったことがある感覚だけど
今のわたしにはもう耐えられないほど心苦しい現実だった。
逃げ出したい…。

「さいってー！ヤリマン。」

ふとわたしの耳に鮮明に

そんな声が届く。
顔は見なかったけど、それは間違いなく聡美の声だった。
堪えていた涙が溢れていた。
もう…無理…。

わたしはカバンを手に持って
教室を飛び出していた。

「あら？どうしたの？
もうホームルーム始まるわよ？」

すれ違う先生の声を見殺し、わたしは外に駆け出た。
もう嫌だ、こんな毎日…なんでわたしだけ…。
出来るだけ速いスピードで校門をくぐり抜ける。
学校が遠くなるのを確認し、誰にも気づかれないような通りに出ると
わたしは速度を落としながら、大声で泣いた。

ペダルを踏む足が悲しいくらいに重い。
わたしは何処に行けばいいのか…それすら分からなくなっていた。

気がつくとやっぱり自分の家に戻っていた。
当たり前だよ、わたしの居場所はここしかない。
実家に帰ったって、お母さんとお父さんの喧嘩に付き合わされて
そのとぼっちを受け取るだけ。
焦燥感に駆り立てられながら、わたしは鍵を開け中に入った。

カバンを投げ出し、制服のままベッドに寝転ぶ。
まだまだ泣き足りないわたしは
誰にも見られていないことをいいことに
今まで溜め込んできた涙を全部放出するかのよう
に泣きじゃくった。
近所迷惑になるかもしれないけど
そんなこと気にしてられないほど、今は泣きたかった。

ふと思い出す、昨日までこの部屋にいた彼。
本当に何処に行っちゃったの？
なんで帰ってきてくれないの？
彼の屈託のないあの笑顔と
「おめでとう。」「サンキュー。」と言ってくれたあの瞬間を思い出す。

…逢いたいよ。
今すぐ逢いたいよ。
もうわたしはその気持ちにすぎるしかなかった。
お願い…助けて…

わたしは気がつくと
泣き疲れて意識を失っていた…

ピンポン…

はっと目を覚ます。
家のチャイムが鳴っている。
時計の針を見ると、わたしが帰ってきてから
まだ 30 分も経っていないようだった。

先生かな…心配してきっと家まで来たんだよね…
居留守使っちゃおうかな…行きたくないもん…。

ピンポン…ピンポン…

チャイムの音は鳴り続けている。
布団を頭に被ってやり過ごそうとするわたし。

ピンポン…ピンポン…ピンポン…

それでもチャイムの音はしつこく鳴り続ける。

まるでわたしが居留守を使っているのを
知っているかのようにだった。

わたしはどうしようかと思ったけど
だんだん申し訳なくなって、出るだけ出ようと思った。
先生だって事情を説明してくれたらきっと理解してくれるはず。
…前に話したときは、相談しても
何も解決につながるようなことしてくれなかったけどね…。

わたしは重い体を起こして玄関に向かう。
窓穴から一応誰なのかを確認する…

…わたしは一気に目が覚めた。
急いで鍵を開けドアを開ける。

…そこには彼が
名前も知らない彼が、立っていた。

彼の顔を見てわたしはまた泣きそうになってしまった。

「よ、よう。」

そう言ってわたしの顔を見る彼。
顔は少しピンクがかった。

「…どこ…行ってたの？」

溢れそうな涙を堪えて彼に問いかける。

「いやその…ごめん。
それより、学校はどうしたんだ？」
「え…いやその、ちょっといろいろあって…。」
「そうか…。
今、時間大丈夫か？」
「え、あ、うん。一応大丈夫…。」
「そか…ええっと…、上がっても平気…かな。」
「う、うん！どうぞ…。」

そう言って彼を上げる。
昨日の朝みたいになたしちはベッドに背もたれながら
2人揃って並んだ。
心臓がまたドキドキと鼓動を打ち始めたのが分かった。
少し沈黙が続く。
恥ずかしながら彼の方を見ると
あぐらをかきながら、頭を少し掻いていた。
何から話そうかと、きっと頭の中で整理しているんだろう。
前より大人っぽく見えるのは、きっと気のせいじゃないよね。

「とりあえず…いろいろありがとう。」

最初に彼から発せられたのは、わたしに対する感謝の言葉だった。

「な、なにが？」

「いやその…俺のためにいろいろしてくれただろ？」

その言葉にわたしは

昨日の出来事を頭の中にフラッシュバックさせて思い出し

再び顔が赤くなるのを感じながら、恥ずかしくなってしまった。

当の彼も自分で言っておきながら

頬を赤く染めて恥ずかしがっているようだった。

きっと彼のほうが恥ずかしいよね。

わたし彼の本当に全てを見てしまったもん…。

「と、とにかく本当にありがとう。

感謝してる。」

「う、うん。どういたしまして…。」

軽く頭を下げる彼に

やっぱりこの人は誠実な人だったんだと

信じてよかったと安心するわたしがいた。

本当は泣きたくなるくらい、その事実が嬉しかった。

「そ、それでさ。

記憶は戻ったの？思い出したの？」

今度はわたしの方から訊いてみた。

わたしの問いに小さく頷き応える彼。

やっぱりそうだったんだ…良かったね、本当に…。

「俺、学校で酷い仕打ちを受けたんだ。」

不意に話し出す彼。

彼の話は想像を絶するほど酷い話だった。

と言うかわたしの受けた仕打ちにあまりにも似ていて

本当の話かどうか若干疑ってしまうほどだった。

—ある日、と言うかあの日の金曜日。
クラスの女の子に告白されたいらしい彼。
彼はその子に恋愛感情を抱いていなかったし
彼の友達とその子が付き合っていることも知っていたため
悪いと思いながら当然断ったらしい。
…その場はそれで落ち着いたらしいんだけど
告白を断られたことに、その女の子はもの凄くプライドを傷つけられたのか
まだ付き合っていた彼氏に
彼に告白されて、断ったけど諦めてくれなくて
無理やり押し倒されてレイプされそうになった、などと言うデタラメを
吹き込んだらしい。

当然怒り奮闘するその彼氏。
彼と仲が良かったらしいんだけど
いくら彼がそんなことしていないと説得しても
聞く耳を持ってくれなかったとのこと。

そこまで聞いてわたしは、自分の身に降りかかったようなことが
他の人が味わっていたりもするんだなぁと驚くと共に
世の中には本当に信じられないようなことをする人がいるんだな…と
半ば俗世間に嫌気が差してしまったりもした。

「それでな。
その日の放課後にその女の子の彼氏…
まァつまりは俺の友達だった奴なんだけど
そいつに呼び出されたんだ。
掃除が終わったら体育館倉庫に来いって。」

淡々と話す彼。
その瞳は徐々に恐怖に怯えるように光を失っていく。
見ていられなくなってわたしは彼の目から少し視線を落とす。
うん、うんと相槌を打つのが
今のわたしにできる精一杯のことだった。

「俺としてもさ、あいつの誤解を解きたかったからさ。
なんで体育館倉庫なんだ？と思ったけど意を決して行ったんだ。
そしたらそこには…」

彼の体が震えているのが分かった。
わたしは自分のことのように辛くなり
無意識のうちに彼の手を両手で握り締めていた。

「すまん…」

息を整える彼。「ううん。」と笑顔を向けるわたし。

「真っ暗だったんだ。何も見えない
あいつの名前を呼んでも何の返事もない。
おかしいな…と思って奥の方まで行ったら…
ガラガラガラ！って扉が閉まるのが分かった。
なんだ！？って思ったときには俺は何人かの奴に
体を押さえつけられてた…」

本当に怖かったんだろうな…
震える彼の体を見て、わたしは疑いなくそう感じた。

「電気がついてな。パーって明るくなった。
身動き取れない体のまま辺りを見回すと
俺のクラスの奴らが全員、俺を取り囲んでた。
何が始まるのかと思ったら、あいつが出てきてな。

『お前俺の彼女にひでえことしてくれたそうじゃねえか。
自分のしたこと分かってんのか？あ？』

って言うわけさ。
いつもは仲良くて笑い合ってるような関係だったのに
豹変したように凶器に満ちた顔でさ…。
さすがの俺の声が出なくなっちゃった。
そしたら俺を取り囲んでた奴らがみんな口々に言うんだ。

『さいてー、信じらんない、強姦魔！』って。

俺も何とか反論しようと思ったけど、そんな隙も与えてくれなかった。
それで『おい、やっちまえ！』って言うあいつの声が聞こえたかと思うと
俺に何人ものクラスメイトが寄ってたかってきた。
振り払おうとしたけど、大勢相手じゃどうにも抵抗できなくてさ。
気がついたら俺…素っ裸にされてた。」

そこまで聞いてわたしは言葉を失った。
なんて…酷いことをするんだろう。
なんで彼の言葉を聞こうとする人がいなかったんだろう。
わたしは自分の受けた境遇とその話を重ね合わせると
涙を堪えることができなくなっていた。

「女の子たちの悲鳴が聞こえた。
男友達たちの笑い声が聞こえた。
俺女子に素っ裸なんて見られたことなかったからさ。
とにかく死ぬほど恥ずかしかった。
でも身動きもとれないし…。
最初は悲鳴をあげてただけの女子たちも徐々に興味を持ち出して
写メを取ったりしてた。
何人かの女子は、俺のちんぽを触ってきたりもした。
そのたびに悲鳴が上がって
触っちゃたーとか汚ーいとか言う言葉を吐き捨てられた。
俺も男だからさ、その…死ぬほど恥ずかしくて勃ちちまって…それも写メでー」
「も、もういいよ。」

淡々と生気を失うように喋る彼の話を
もう聞いていられなくなり
わたしは割り込んでそれを止めた。

「す、すまん。こんな話聞いても仕方ないよな…。」

その言葉にウンと大きく首を振ってみせるわたし。

「話してくれてありがとう。」

そんなことがあったなんてね…ちょっとびっくりしたけど
ホント…酷いことしてる人っているんだね。」
「うん…なんか何を信じていいか分からなくなっちゃった。」

わたしと同じような苦しみを抱えている人がいたなんてな…。
ずっと1人ぼっちだと思っていたから
不謹慎かもしれないけどその事実にはわたしは
少し救われたような気持ちになっていた。

その後彼は気づいたら意識を失っていて
目を覚ましたときには体育館倉庫には誰もいなかったらしい。
制服は誰かが持って行ってしまったらしく
素っ裸のままだった。
辛うじて体育館倉庫に置いてあった予備用の体育着上下があったらしく
それを着て外に出たらしい。
外は雨が降っていて傘を取りに行こうかと迷ったけど
そんな気力もなく
ただ彼は自分の家を目指して、裸足のまま無心で帰った。
家に着く頃にはもう頭の中は真っ白で
そこら辺からはもうあまり詳しくは覚えてないみたい。
それで自分の家の前のドアに崩れるように倒れて…
意識を取り戻したときには
ほとんどの記憶が失われていた…。
これがあの日彼の身に起こったことの真相らしかった。

…だからあの日寒いのにそんな格好でいたんだね。
いろんなことが彼の話と繋がっていく。
つまりはあの日彼はノーパンだったってことか…。
なんて新たな真相まで明らかになったりした。

それにしても彼の話はわたしにとって衝撃的だった。
わたしが受けた仕打ちも相当なものだったけど
彼のそれは遥かにわたしよりも酷いものに思えて仕方なかった。
記憶を失ってしまったくらいだもんね。

その恥ずかしさは計り知れないものだったんだと思う。
クラス全員にすっぽんぽん姿を見られたなんて…
しかも触られたり写メ取られたり
わたしがそんなことされたらなんてことを
想像するだけで背筋がゾクゾクするのを感じた。

わたしは流れ出る涙を服でおもむろに拭い
精一杯の笑顔で彼に微笑みかけた。

「辛かったね。」

そう言うわたしの目に顔を赤らめた彼が視線を合わせる。

「本当にお前は、優しいんだな。」

その言葉にドキドキと心臓が動き出す。
やっぱりわたしはこの人のことが好きなんだな…。
彼に記憶が戻った今でも、その気持ちに変化がないことを確認できて
わたしはまた泣きそうになるくらい、嬉しかった。

…でも1つ気になることがあった。
彼は自分の家のドアの前で倒れ、意識を失ったと言った。
でも実際には彼はわたしの家の前に倒れていた。

「…これって、どういうこと？」

その疑問をそのまま彼にぶつけると
びっくりするような答えが返ってきた。

「ああ、実は俺もこのアパートに住んでるんだよ。」
「え!？」

多分ここ数年で一番驚いてしまった瞬間。
そんなわたしの驚きっぷりに顔を赤らめ微笑む彼。

「この隣。101号室が、俺の部屋だ。」

意識が朦朧としてたから、間違えてお前の部屋を自分の部屋だと間違えちゃったんだな。」

照れながらそう告げる彼。

なんだ…そうだったんだ…。

これで全てが繋がった。

今まで抱いていた疑問が全て1つの鎖となって繋がって

それが全て嘘ではなく真実であると、わたしに教えてくれた。

その後聞いた話だと

彼はわたしの通う西高と真逆方向にある東高に通っているということ。

学年もわたしと一緒に2年生ということだった。

更にはある事情により家にいられなくなり

高校生だと言うのに1人暮らしをしているとのこと。

何から何まで似ていること尽くしで

お互い、こんなことってあるんだな…と

顔を見合わせて感心していた。

ここまで似てると運命みたいなものを感じちゃうね。

なんて言葉を言おうと思ったけど

そんな勇気はさすがになく、喉の辺りまで出て、すぐさま飲み込んだ。

運命を感じてしまったのは、本当だけどね。

…彼のほうはどうだか分からないけどさ。

…そうそうわたしのことも話した。

わたしのことも知ってもらいたかったからね。

家のこと、学校で起きたこと。

詳しく全てを彼に打ち明けた。

そんなわたしの話を彼は、本当に親身になって聞いてくれた。

「お前も大変だったんだな…」と

少しびっくりしたように慰めてくれる。

そして、良く頑張ったな、と言ってわたしの頭を撫でてくれた。

初めてされた行為に、わたしの胸はまたもや跳ね上がる。

まだ逢ってから間もないけどさ。

大好きだよ…自信を持って思える感情だった。

話によると彼はさすがに決心がつかず

今日は学校を無断で休んだとのことだった。
わたしも無断ではないけどいろいろあって
いても立ってもいられず帰ってきてしまったことを告げた。

お互いどうしようか…と言う話になり
気がつくとも2人して見つめ合っていた。
当然のごとくドキドキしたけど
見つめ合う彼の顔からもそのドキドキを読み取ることが出来てしまい
気づくとわたしは彼とほぼ同時に吹き出していた。
今後のことを考えると頭が痛くなってしまうけど
もし彼がいてくれるならば
なんとか乗り越えられるような気がした。

「わたし、明日も学校行ってみようと思う。」

わたしは彼にその意志を告げた。

「そっか。」

彼はわたしの顔を見て笑顔で頷いてくれた。
その笑顔があれば、わたし絶対頑張れるよ。

「…君は？」

わたしは聞き返す。
うーんと少し迷ったようにうなる彼。

「このまま学校行かないわけにも行かないもんな。
恥ずかしいけど、このままじゃやっぱり悔しいし。
誤解はやっぱり解きたいしな。」
「うん、わたしも。」

そう言う彼にわたしは同意するようにすぐさま返事をした。
そして面白いことをわたしに注文してきた。

「うん、そうだな。」

お前のカルボナーラをもっかい食べれば
明日は学校行けるような気がするな。」

そう言ってわたしに照れながら笑いかけてくる彼。
意外なワードにわたしは少し驚いたけど
わたしを必要としてくれる人がいる…
少なくとも今彼はわたしのカルボナーラを食べたいと言ってくれている…
その事実がもの凄く嬉しくて
わたしはまたもや溢れ出る涙を抑えきれなくなっていた。

「な、なんで泣くんだ？
俺また変なこと言った…かな？」

そう言って心配そうにわたしを見つめる彼。
こう言う優しいところは全く変わってないんだから…。
そんなことをふと思った。

「う、うるさいなもう！
ほら、さっさと出かけるよ！」

そう言って立ち上がり彼の手を引くわたし。

「ど、何処に行くんだ？」
「カルボナーラ食べたいんでしょ？
材料ないから買いに行くの！」
「あ、なるほど。」

ガッテンと言った感じで笑う彼。
つられてわたしも笑顔になる。

そのあと2人でカップルみたいに買い物をして
家に帰ってきてカルボナーラを作って食べた。
昼ごはんにカルボナーラって言う普段あまりしないようなことに
少し違和感を覚えたりもしたけど

そんなの全然問題なかった。
彼はもちろん言うまでもなく、おいしいと言ってくれた。
どうせ言ってくれるんだろうと思って
その言葉を待っていた自分が、なんだか可愛く思えた。

時計の針はもう午後3時を過ぎていた。
これからどうしようと思ったけど
彼はとりあえずやることがあるから自分の部屋に戻ると言った。
土日の宿題もまだ溜まってるし
明日の学校についても、いろいろ1人で考えたいとのことだった。
少し寂しかったけどしょうがないな、と我慢した。
…と言うかすぐお隣さんだったね。
それなのに寂しがってるわたしとか
どれだけぞっこんなんだって話だよ。

玄関まで彼を送る。

「今度、そっちの家にも行っていいかな？」

わたしは不意に彼に訊いていた。
彼との関係が続く確証が、きっと欲しかったんだと思う。

「汚くてもいいなら、全然構わないよ。」

照れながらそう告げる彼。

「えー、そこは片付けてよー。」

「へいへーい。」

そう言って頭を掻きながら笑う彼。
連鎖するかのようにつられて笑みがこぼれる。
この幸せをここで終わらせたくない。
それが、今わたしが持っている唯一と言っていいほどの願いだった。

「それじゃ、また。」

「うん、また。」

そう言って彼は自分の部屋に戻っていった。

1人になった部屋で、わたしは鼓動を改めて確かめた。
こんなにドキドキしてたんだ、わたし…。
それと同時ににやけが止まらなくなる。
いても立ってもいられずにベッドに顔を突っ込んで
体をよじらせて恥ずかしがった。

学校での不安や今までの辛い思いは
びっくりするくらいに吹っ飛んでいた。
恋の力って凄いなあ。彼がいれば何でも出来る気がする。

ふと見つめる壁のすぐ向こう側に彼がいると思うと
それだけで何か救われたような気になれた。

わたしももう逃げてなんてられない。
彼に勇気をもったんだ。

辛くても明日から頑張ろう。
闘い抜いてやろう。
わたしはそう心に強く誓った。

7時には目が覚めていた。
睡眠もバッチリとったし、久々に清々しい朝だった。
しっかり朝食も取り、いざ向かわんと玄関を飛び出す。

再出発にはふさわしいくらい良く晴れた日だった。
すずめのさえずりさえも
わたしを応援してくれているかのよう。

ドアを閉め鍵をかける。
ふとそのドアを見て金曜日の夕方
彼がここに倒れ掛かっていたときのことを思い出した。

もし彼が場所を間違わないで
自分の 101 号室のドアの前で倒れていたなら
どうなっていたんだろうとふと思った。
きっとわたしはそのことには気づいていただろうけど
変な人がいると思っただけで
声をかけずに終わっていたかもしれない。

…ふと、いろんな残酷な境遇が脳裏をよぎる。
幾度となく期待を裏切られ、神に嫌われていると自分を呪った。

でもそんな神様も 1 つだけわたしにプレゼントをくれた。
彼を、間違えてわたしの部屋の前に置いてくれたんだ。
ただそれだけのことで
真っ暗な世界に希望の光が注ぎこまれるなんて
本当に人生分らないものだな…とつくづく思う。
そんなことを思えるようになったのも
きっと彼との出逢いがあったからこそなんだろうけどね。

そんなことを思っていると
隣の部屋から誰かが出てくるのが横目に映った。

それは紛れもなく、制服姿の彼だった。

「おう、おはよう。」

「お、おはよ。」

ぎこちなく、でも笑顔で挨拶を交わす。

「はぁ、今日から再スタートだ。」

「だな、俺もまあ似たようなもんだ。」

「大丈夫かな。」

「大丈夫さ、きっとお前なら。」

「そうかな。」

「うん。」

「きっと君もうまくいくよ。」

「…そう言われると、なんだか大丈夫な気がするから不思議だ。」

「…なーにそれ。」

たわいもない話を 101 号室と 102 号室の
ちょうど中間くらいの位置で交わすわたしたち。

ふと沈黙になる。

見つめ合うわたしたち。

それは決して苦に感じるものではなかった。

わたしは彼に歩み寄る。

鏡に映ったみたいに彼も同じように歩み寄る。

彼の真剣な顔は薄ピンク色に染まっている。

感染するかのように、わたしの顔も熱くなる。

「学校行っても頑張れる…何かが欲しいな。」

「…奇遇だな、俺もだ。」

そう言って顔を彼に近づける。

彼の胸に手を当てると、わたしより早い鼓動が制服の上からでも伝わってきた。

恥ずかしいんだね…わたしもだよ。

そう心の中で呟いて

そっと彼にキスをした。

— おしまい —